

一般国道11号高松東道路建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第五冊

井手東II遺跡

1995. 3

高松市教育委員会
建設省四国地方建設局

井手東II遺跡正誤表

頁		誤	正
はじめに	4	井手東II遺跡の発堀調査	掘
	10	発堀調査が徐々に	掘
5	18	の組物確認。座相の可能性	(削除)
11	8	本書に報告する	(削除)
	24	周溝墓遺跡に加えて	周溝墓に加えて
15	22	香川県教育委員会	高松市教育委員会
	25		
	26	1993	1992
	29		
16	1	1993	1992
	13	高松市教育委員会	高松市教育委員会 1992
28	6	SD01 II期の水路	SD01 (II期) の水路
	34	底面の幅は約0.4cm	m
39	4	平面形は不正円形	整
	31	中央やや西よりに	寄り
40	25	中央やや東よりに	
41	1	中央やや東よりに	寄り
42	2	中央やや北よりに	
43	7	上層が僅	下
	8	幅ともに大きく変化	幅ともに変化
	11	SD12~14と呼称	12・14
	16	SD12・13に切られ	SD12に切られ

卷頭図版
1



SD01出土石棒



1. 井手東Ⅱ遺跡航空写真（東から）



2. 同 (南から)

はじめに

私たちの大好きな街、高松は、日々変貌を遂げております。今回報告の発掘調査の原因となつた高松東道路は、高松平野の中央部を東西に貫く大動脈でございます。沿線は日に日に姿形を変えておりまして、のどかな田園風景を知る私にとっては隔世の感があります。

と申しましても、井手東Ⅱ遺跡の発掘調査の結果をみると、私たちが見ていたのどかな田園風景も大きく変貌を遂げた結果ではないかと感じた次第でございます。そう考えますと、失われた風景を記録する必要性を痛感いたしたところでございます。

ゆったりと流れる小川の周囲に人々が住んでいた縄文時代晩期から弥生時代初頭の風景、毎年秋に頭を垂れる稻穂の群が織りなす今までの農村風景、都市化著しい現在の風景、いずれも一つの風景かと存じます。これから発展しようとする風景を記録することも大切ですが、その根源をなす過去の風景を調べ、記録として残すことも重要です。発掘調査が徐々にではありますが、確実に進みますならば、高松平野の古い姿、時代時代の風景が明らかになると存じます。その時を楽しみに、文化財行政に邁進することを誓いましてご挨拶とさせていただきます。

最後になりましたが、四国地方建設局をはじめ、関係者の皆様にこの報告書を呈示させていただくことで市教育委員会としての御礼とさせていただきたいと思います。

平成7年3月

高松市教育委員会

教育長 山口 寮式

例　　言

- 1 本書は、一般国道11号高松東道路建設とともに埋蔵文化財発掘調査報告書の第5冊で、高松市伏石町に所在する井手東（いでひがし）Ⅱ遺跡の調査報告を収録した。
- 2 本事業は、高松東道路、上天神一前田東間8kmのうち太田第2土地区画整理事業地に含まれる約1.7kmを対象とする。
- 3 本事業は、建設省四国地方建設局から高松市が受託し、高松市教育委員会が発掘調査を実施した。
- 4 事業費は、建設省四国地方建設局が全額を負担した。
- 5 調査にあたって下記の関係諸機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。

建設省四国地方建設局	建設省四国地方建設局香川工事事務所
香川県教育委員会	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
高松市都市開発部太田第2土地区画整理事務所	

香川大学 丹羽佑一 東京大学 石上英一 京都大学 金田章裕
奈良国立文化財研究所 工楽善通 牛嶋茂 立命館大学 高橋学
皇學館大學 外山秀一 (敬称略)

- 6 調査全般を通じて、末光甲正氏、中西克也氏の協力を得た。
- 8 本遺跡の調査および整理作業は、文化財係長藤井総括のもと山本、中西、山元があたった。本報告書の執筆分担は第2章を山本が、第3章第2節、第3～5節の遺構、第4章第1節を中西が執筆し、それ以外は山元が行った。全体の編集は山本、中西の協力を得て、山元が行った。
- 9 写真は、遺構については調査担当者が撮影し、遺物写真については写房 楠華堂（楠本真紀子）に委託した。

10 本遺跡の調査における各業務の委託先は次のとおりである。

遺跡写真測量業務 アジア航測株式会社

11 本書で使用する遺構略号は次のとおりである。

S K 土坑 S D 溝状遺構 S P 柱穴

12 本文の挿図中で国土地理院発行の5万分の1地形図「高松」、「高松南部」、を一部改変して使用した。

13 発掘調査で得られた資料のすべては、高松市教育委員会で保管している。活用されたい。

14 井手東Ⅱ遺跡の概要はこれまでに下記の文献によって一部報告をおこなっているが、いずれも調査終了時点のものや、整理作業中の成果であり、その後の整理作業の中で事実誤認が確認されたり、新しい成果が加わり遺構・遺物に対しての見解に違いがでてきてている。これらの相違については、今回の報告をもって正式なものとする。

・中西克也 「井手東Ⅱ遺跡」『讃岐国弘福寺領の調査』 高松市教育委員会 1992. 3

・『むかしの高松 第3号』 高松市教育委員会 1992. 3

井手東Ⅱ遺跡発掘調査報告書目次

はじめに

例　　言

第1章　調査の経緯と経過.....	1
第1節　調査の経緯.....	1
第2節　調査の経過.....	2
第2章　地理的環境・歴史的環境.....	9
第1節　地理的環境.....	9
第2節　歴史的環境.....	11
第3章　発掘調査の成果.....	19
第1節　調査区の設定.....	19
第2節　遺跡の概要と層序.....	20
第3節　縄文・弥生時代の遺構と遺物.....	27
第4節　古代の遺物.....	38
第5節　近世の遺構と遺物.....	39
第4章　調査のまとめ.....	43
第1節　遺構について.....	43
第2節　遺物について.....	44

挿図目次

第1図 試掘トレンド設定図	2	第18図 SD05土層図	34
第2図 高松東道路路線内 遺跡調査位置図	3~4	第19図 SD06土層図	35
第3図 調査位置図	9	第20図 SD06出土土器実測図	35
第4図 遺跡分布図	13~14	第21図 SD07土層図	35
第5図 調査区設定図	19	第22図 SD08土層図(1)	35
第6図 井手東Ⅱ遺跡周辺微地形図	21~22	第23図 SD08土層図(2)	35
第7図 井手東Ⅱ遺跡遺構配置図	23~24	第24図 SD08出土土器実測図	35
第8図 SD01土層図	25~26	第25図 SD09土層図	36
第9図 SD01（Ⅰ期）出土土器実測図	27	第26図 SD10土層図	36
第10図 SD01（Ⅱ期） 出土土器実測図	28	第27図 SD11土層図	36
第11図 SD01（Ⅱ期） 出土土器実測図(2)	30	第28図 SD14土層図	36
第12図 SD01（Ⅱ期） 出土石器実測図(1)	31	第29図 遺構外出土土器実測図	38
第13図 SD01（Ⅱ期） 出土石器実測図(2)	32	第30図 SK01実測図	39
第14図 SD01（Ⅱ期） 出土石棒実測図	33	第31図 SK01出土土器実測図	39
第15図 SD01出土土器実測図	33	第32図 SK02実測図	39
第16図 SD03土層図	34	第33図 SK03土層図	40
第17図 SD04土層図	34	第34図 SK03出土土器実測図	40
		第35図 SK04土層図	40
		第36図 SK05土層図	40
		第37図 SK06土層図	40
		第38図 SK07土層図	41
		第39図 SK08実測図	41
		第40図 SK09実測図	42

挿表目次

第1表 一般国道11号高松東道路埋蔵文化財調査事業工程表.....	1
第2表 整理作業工程表.....	6
遺物観察表.....	46
報告書抄録（巻末）	

付図目次

付図1 遺構配置図(1)

縄文～弥生時代

付図2 遺構配置図(2)

弥生～近世

図版目次

卷頭 1－1 井手東Ⅱ遺跡航空写真（東から）	図版 5－1 SD01（Ⅱ期）遺物出土状況
－2 同 （南から）	－2 SD01（Ⅱ期）完掘状況
卷頭 2 SD01出土石棒	図版 6－1 SD08完掘状況（南西から）
図版 1－1 SD01（Ⅱ期）完掘状況（北東から）	－2 SD03完掘状況（南西から）
－2 SD01（Ⅱ期）完掘状況（南西から）	－3 SD12～14完掘状況（南西から）
図版 2－1 SD01拡張区（Ⅰ期）完掘状況 （南西から）	－4 SD10完掘状況（西から）
－2 SD01拡張区（Ⅱ期）完掘状況 （南西から）	図版 7－1 SK01・02内集石検出状況（西から）
図版 3－1 SD01セクションベルト(1) 土層堆積状況	－2 SK01内集石検出状況（西から）
－2 SD01セクションベルト(1) 細部土層堆積状況	図版 8－1 SK08完掘状況（東から）
図版 4－1 SD01セクションベルト(2) 土層堆積状況	－2 SK09完掘状況（南から）
－2 SD01セクションベルト(4) 土層堆積状況	図版 9－1 SD01（Ⅱ期）完掘状況（南西から）
	－2 SD01（Ⅱ期）完掘状況（南から）
	図版 10 SD01出土土器
	図版 11－1 SD01出土石器
	－2 SD01出土石棒
	－3 SK01出土土器

第 1 章

調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

昭和53年的一般国道11号高松東道路の都市計画決定にともない、香川県都市計画審議会は、昭和62年2月2日、路線周辺の計画的な市街化および都市基盤整備をすすめるとともに、民間事業の活性化を目的として香川中央都市計画事業太田第2土地区画整理事業の施行を決定した。事業は太田、木太、林、多肥の4地区にまたがる約360haにおいて、この範囲に含まれる高松東道路約1.7km分の用地も区画整理事業の換地処理によって確保されることとなったため、この区間の東道路用地については、高松市教育委員会が発掘調査を実施することで、昭和62年12月15日に四国地方建設局、香川県教育委員会、高松市の三者間で覚書が取り交わされた。

現地調査は平成元年夏の区画整理事業仮換地指定を受けて着手し、浴・長池および浴・松ノ木部分の試掘調査を実施して遺跡の範囲ならびに性格を確定した。そして8月15日から平成2年3月20日で浴・長池遺跡の発掘調査を実施した。

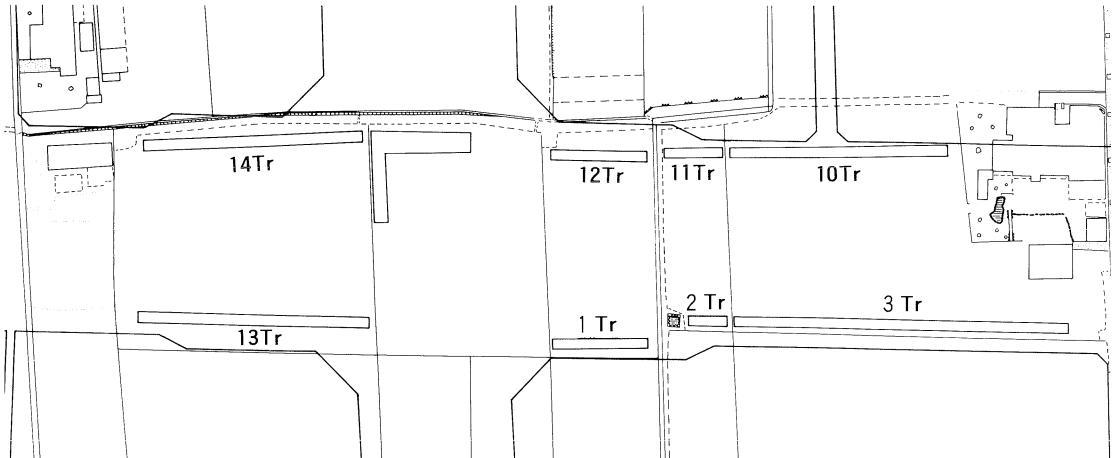
そして平成2年度以降は、前年度の試掘調査で遺跡の所在と範囲が確定しているものの発掘調査と、新たに用地が確保された部分の試掘調査を平行して実施し、平成4年9月末日をもって東道路予定地すべての発掘調査を終了した。

整理作業は、現地での発掘調査が進行している平成3年度後半から分類基礎整理に着手し、発掘調査が終了した平成4年10月から本格的な作業にかかった。そして平成5年3月に第1冊目として浴・長池遺跡の報告書を刊行し、昨年度までに、浴・松ノ木遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡の刊行を終了している。今年度は、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡の報告書の刊行を予定しており、平成7年度中に残る居石遺跡、蛙股遺跡の報告書の刊行をもって事業が完了する。

年 度	試掘調査	発掘調査	整理作業	報告書刊行
平成元	浴・長池、浴・松ノ木	浴・長池		
2	浴・長池Ⅱ 井手東Ⅰ、Ⅱ、居石	浴・松ノ木 浴・長池Ⅱ		
3	蛙股	井手東Ⅰ、Ⅱ 居石、蛙股	浴・長池	
4		蛙股	浴・松ノ木	浴・長池
5			浴・長池Ⅱ 井手東Ⅰ、Ⅱ	浴・松ノ木 浴・長池Ⅱ
6			居石、蛙股	井手東Ⅰ、Ⅱ
7				居石、蛙股（予定）

第1表 一般国道11号高松東道路埋蔵文化財調査事業工程表

第2節 調査の経過

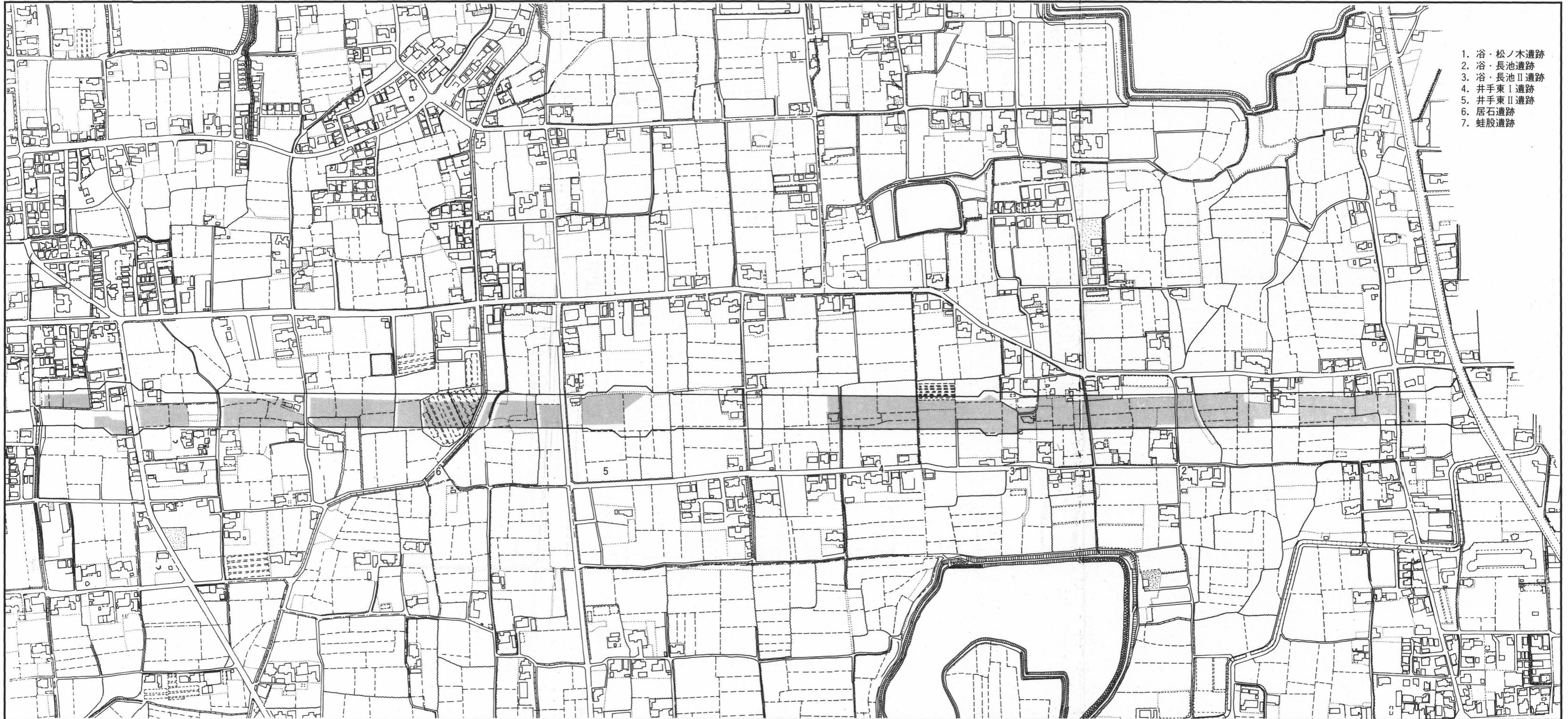


第1図 試掘トレンチ設定図

井手東Ⅰ遺跡の試掘調査は、平成2年度の仮換地指定を受けて確保された東道路予定地約40,000m²について、平成2年7月30日から8月24日にかけて実施した。試掘による実掘面積は1,674m²である。調査は、従来どおり東道路予定地のほぼ境界に路線に沿って試掘溝を設定し、バックホーによって掘削を行いながら土層観察等によって遺跡の有無を判断した。試掘範囲内には最終的に21本の試掘溝を設定し、掘削を行った。その内、井手東Ⅱ遺跡の調査範囲である13、14Trにおいて幅4.5m、深さ0.6mと幅0.6m、深さ0.2mの規模をもつ溝状遺構を確認し、弥生土器も出土した。13、14Trと1、12Trの間については用地交渉が進んでおらず、後日改めて試掘調査を行うこととなり、第一次調査中の平成3年2月18、19日に実施し、遺構を確認したため、後日改めて調査を実施することとなった。

以上の試掘成果を検討した結果、遺構を確認した範囲が狭く、検出した遺構についてもさほど土量がでないこと、調査期間も短期間で終わる可能性が高いことより、従来の工事請負方式にかえて直営方式で調査を実施することになった。

現地での発掘調査は平成3年1月7日～2月26日に一次調査を行い、拡張部分を平成3年5月2日～6月5日に二次調査を行って、無事終了することができた。最終的な調査面積は2,402m²である。その結果、縄文時代から弥生時代にかけての遺構と、近世と考えられる遺構を確認した。中でも、SD01からは量的には少なかったものの、縄文時代晚期と弥生時代前期の土器、石器が混在した状態で出土し、縄文時代晚期と弥生時代前期が併存する事例を追証することとなった。それぞれの時期に属する遺物は、割合的には半々であり、石器においては石棒、打製石斧（石鍬）、石庖丁と両時期に属する遺物が土器と同様出土した。調査の経過については調査日誌抄を参照されたい。



第2図 高松東道路路線内遺跡調査位置図

調査日誌抄

(第一次調査)

3. 1. 7 本日より作業員による就労開始。
8 遺構検出開始。
18 遺構検出状況写真撮影。
22 調査区東側より遺構掘削開始。
23 SD01～04（北側）掘削終了。SK
01より土釜出土。
29 SD01（南部）掘削開始。
30 SD01はⅡ期に分かれ、Ⅰ期は弥
生時代前期、Ⅱ期は縄文晚期～
弥生時代前期と考えられる。
2. 4 土層写真撮影。土層図作成。
12 完掘状況写真撮影。航空測量準
備。
13 航空測量。SD01（Ⅱ期）掘り下
げ中。
18 SD01（Ⅱ期）掘り下げ継続中。
溝底付近に土器集中。遺物出土
状況写真撮影。東側部分試掘調
査。溝、土坑確認。

20 SD01（Ⅱ期）完掘。完掘状況写
真撮影。平面図、土層図作成。

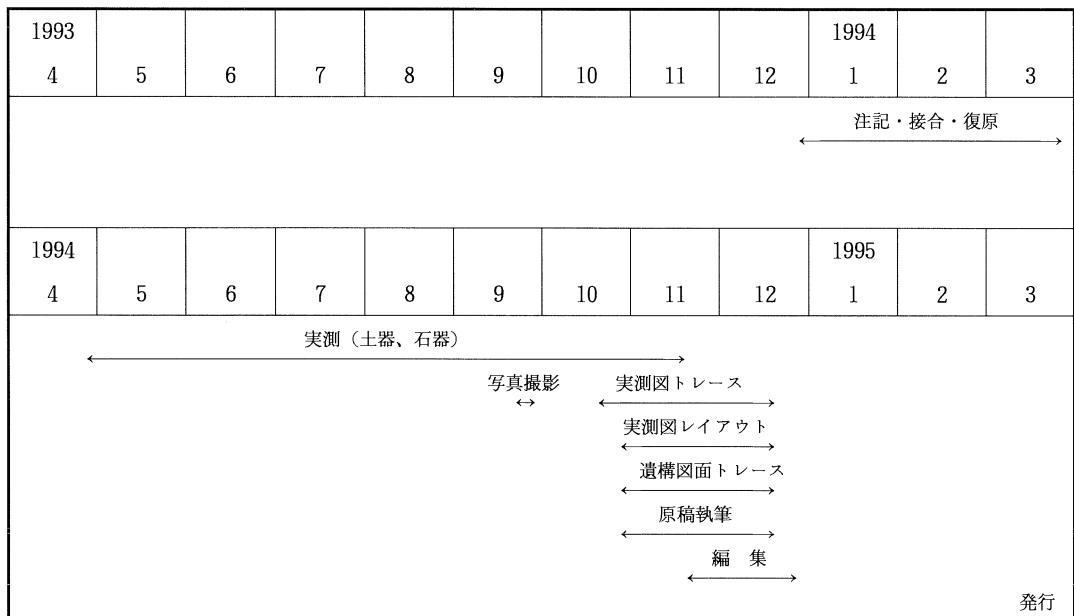
26 発掘機材を撤収し、発掘調査を
終了する。

(第二次調査)

3. 5. 7 本日より拡張区の作業を開始す
る。
9 上面精査。遺構検出。
10 SD01（Ⅰ期）掘り下げ。
14 SD01（Ⅰ期）掘り下げ。溝底よ
り数点遺物出土。
24 SD01（Ⅱ期）掘り下げ。
27 SD01セクションベルト①土層図
終了。畦除去。
28 SD01（Ⅱ期）完掘。
30 SD01（Ⅱ期）完掘状況写真撮影。
平面図（S = 1/50）作成中。
の組物確認。座棺の可能性。
6. 5 SD01（Ⅱ期）平面図作成終了。
本日にて現場作業を終了する。

第3節 整理作業の経過

整理作業は、井手東Ⅰ遺跡の整理作業と平行して実施し、出土した土器の接合作業から開始した。整理作業は、調査担当者を中心として、当初、整理補助員5名の援助を受けて整理作業を実施していたが、平成6年5月から整理補助員を1名増員し、作業能率を高めるよう努力した。整理作業の経過については別表の整理作業工程表に示したとおりである。整理作業は当初、調査面積も少なく、検出した遺構および出土遺物が少ないこともあり、早急に完了する予定であったが、同時に整理作業を行っていた井手東Ⅰ遺跡の整理作業が、予想以上に多かったことも影響し、整理補助員の作業がなかなか井手東Ⅱ遺跡の整理作業に集中できなかったこともあります。平行して行っていた井手東Ⅱ遺跡の整理作業についても影響が出たが、何とか、ここに報告書の作成を完了することができた。報告書の作成に携わっていただいた多くの方々に感謝したい。



第2表 整理作業工程表

なお、発掘調査および整理作業の関係者は次のとおりである。

発掘調査（平成2年度）

教育長	三木義夫		
教育部長	多田 孜		
教育部次長	増田昌三		
文化振興課長	多田恒男		
文化振興課長補佐	亀井 俊		
文化財係長	藤井雄三		
文化財係主事	山本英之		
	川畑 聰	文化振興課	中西克也
文化財係事務員	山元敏裕	非常勤嘱託	玉田和子
太田第2土地	小坂信夫		金森澄子
区画整理事務所	為定典生		井口敬三
			宮内秀樹
			岡田信子
			佐々木由美子

発掘調査（平成3年度）

教育長	三木義夫		
教育部長	多田 孜		
教育部次長	増田昌三		
文化振興課長	多田恒男		
文化振興課長補佐	亀井 俊		
	藤田容三		
文化財係長	藤井雄三		
文化財係主事	山本英之	文化振興課	中西克也
	川畑 聰	非常勤嘱託	玉田和子
	山元敏裕		金森澄子
太田第2土地	小坂信夫		井口敬三
区画整理事務所	為定典生		宮内秀樹
			松田重治
			出石真理子
			佐々木由美子

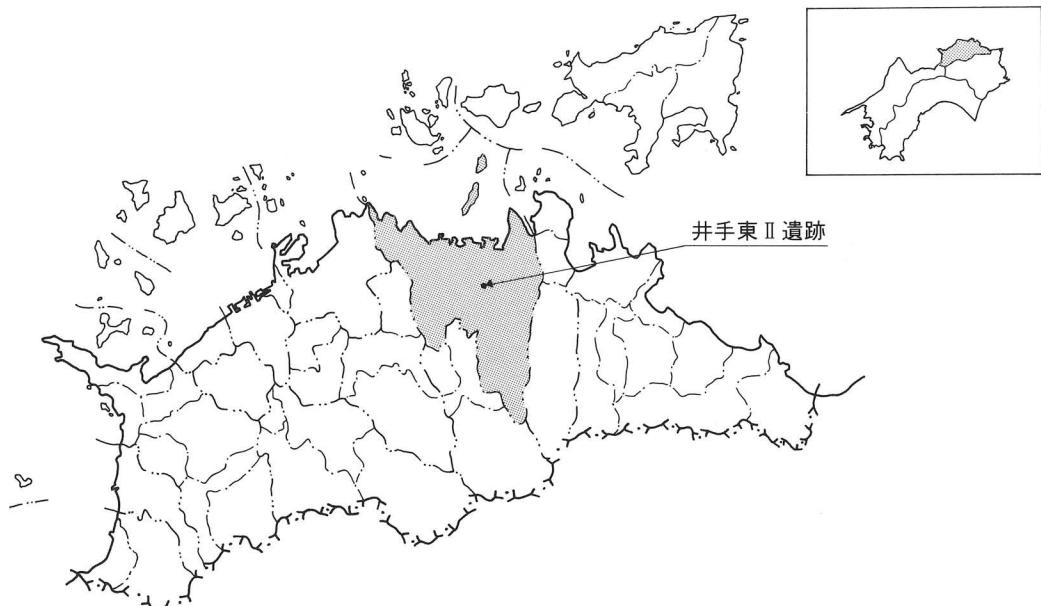
整理作業（平成5・6年度）

教育長	山口寮式
文化部長	上里文磨（～H 6. 3）
	宮内秀起（H 6. 4～）
文化部次長	宮内秀起（～H 6. 3）
	中村栄治（H 6. 4～）
文化振興課長	多田恒男（～H 6. 3）
文化振興課長補佐	藤田容三
文化財係長	藤井雄三
文化財係主事	山本英之 山元敏裕
太田第2土地	為定典生（～H 5. 4）
区画整理事務所	小田 薫（H 5. 5～H 6. 4） 西池孝博
文化振興課	岡田信子 吉本みどり
非常勤嘱託	竹林弘子 出石真理子 井口夫美子 佐々木由美子（～H 5. 7） 大川玲子 山中規子（H 6. 4～）

第 2 章

地理的環境・歷史的環境

第1節 地理的環境



第3図 調査位置図

高松市は、四国の北東部、香川県のほぼ中央部に位置する。瀬戸大橋架橋前はJR連絡船、国道フェリー等で本州と連結し、四国の表玄関の役割を果たし、架橋後も中央省庁の出先や大手企業の地方支店が多く集中し、四国の中核管理機能を担う地方都市として33万人余の人口が集中している。

瀬戸内海沿岸に東西に連なる香川県の平野部は、一般に讃岐平野として総称されるが、実際は東から長尾平野、高松平野、丸亀平野、三豊平野といった地域単位の小平野に細分でき、いずれも南部の阿讃山脈に源を発する中小河川によって形成された沖積地である。このうち高松平野は、北を瀬戸内海、東を立石山系、南を阿讃山脈、西を五色台山塊に限られた総面積約19km²、丸亀平野に続く規模をもち、大部分が高松市の行政区域に含まれる。

平野の境界を画する低位山塊及び屋島、紫雲山等の島状の独立丘陵は、侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われたことによって侵食解析から取り残されて形成された、メサ、またはビュートと呼ばれるもので、讃岐ののどかな田園風景の象徴

のひとつとなっている。

高松平野には、西から本津川、香東川、春日川、新川といった河川が瀬戸内海に向けて北流しているが、平野形成の大部分は塩江町に源を発する香東川に負っている。ただ春日川以東の部分のみが春日川、新川といった小河川の影響下になるものの扇状地の発達は見られない。

現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は、17世紀はじめの河川改修によるもので、それ以前には石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、17世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残をとどめている。

これらのため池は、年間1000mm前後と降水量に乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠のものであるが、林、多肥地区周辺では扇状地末端部にあたりことから、ため池に加えて出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が古代から盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。これらの水源毎の受益範囲（水掛）は、近世以降の三条池、野田池等、微高地上に四周に堤防を巡らせ堤防の全部または一部が条里の阡陌に沿った皿池や山麓部の三谷三郎池、神内池といった大規模なため池が整備されてからも大きな変化なく踏襲されてきた。しかし、昭和50年の香川用水の通水によって、この一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水確保の不安が払拭された反面、大池、長池等のため池が三郎池の子池となり、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

今回高松東道路の横断によって一連の調査を実施した太田、林地区は、地形的には扇状地の末端部にあたり、香東川の本流に接するとともにまさにこの“出水”に古くから農業と生活の多くを依存してきた地域であるといえる。

現在、東道路建設（平成5年開通）をはじめとする区画整理事業、空港跡地開発等に伴う大規模発掘調査によって、弥生時代から井戸、出水の確認例が頻繁で、水田も弥生時代前期から大規模に開発されていたことが明らかになりつつある。

参考文献

- 「讃岐国弘福寺領の調査」 高松市教育委員会 1992
「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第一冊 浴・長池遺跡」
高松市教育委員会 1993
「 同 上 第二冊 浴・松ノ木遺跡」 高松市教育委員会 1994
「 同 上 第三冊 浴・長池Ⅱ遺跡」 高松市教育委員会 1994

第2節 歴史的環境

井手東Ⅱ遺跡が所在する太田、林地区周辺では、ここ10年足らずの開発ラッシュによって多くの遺跡が発掘されつつあり、その数は日を追って増加しているといえる状況にある。これらの大部分は、現在正式報告の刊行に向けて作業が進行中であるため、ここでは現段階で明らかとなっている調査成果を中心として本遺跡周辺（太田、林地区）の遺跡の分布を概観する。

縄文時代では、大池遺跡（木太町）⁽¹⁾で草創期の有舌尖頭器2点の採集が報告されている。また、地形環境の方面では本書に報告する井手東Ⅰ遺跡（伏石町）、蛙股遺跡⁽²⁾で現地表下約40～70cmにアカホヤ火山灰の自然堆積層が確認されており、縄文中期の平野の形成課程を窺うことができる。

縄文晩期では、林・坊城遺跡（六条町）⁽³⁾、浴・松ノ木遺跡（林町）⁽⁴⁾、浴・長池遺跡（林町）⁽⁵⁾、浴・長池Ⅱ遺跡（伏石町）⁽⁶⁾、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡（伏石町）⁽⁷⁾、居石遺跡（伏石町）⁽⁸⁾、上天神遺跡（三条町）⁽⁹⁾が確認された。これらのうち、晩期でも前半に属する居石遺跡と井手東Ⅰ遺跡、上天神遺跡以外は、旧河道中に弥生前期初頭の土器と混在して出土し、両時期が密接に連携していることが改めて窺える。

弥生時代前期になると、縄文晩期から連続する前述の遺跡に加えて天満・宮西遺跡（松縄町）⁽¹⁰⁾、空港跡地遺跡（林町）⁽¹¹⁾、大池遺跡（木太町）、松縄下所遺跡（松縄町）⁽¹²⁾等が新たに出現する。中でも浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡ではこの時期から自然堤防上および後背湿地に整った小区画の水田が営まれており、早い時期から稻作文化が受け入れられていたことが知られるほか、天満・宮西遺跡では数棟の円形住居を囲む直径約300mと推定される周溝が検出されている。

続く弥生中期前半では、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、井手東Ⅰ遺跡、凹原遺跡（多肥下町）⁽¹³⁾、多肥松林遺跡⁽¹⁴⁾、日暮・松林遺跡⁽¹⁵⁾がみられるにすぎない。このうち、浴・長池遺跡では4棟の竪穴住居、6棟の掘立柱建物跡、2基の周溝墓遺跡に加えて大量の河川投棄土器群が出土し、凹原遺跡でも石器製作工房と推定できる竪穴住居1棟を確認する。最近の調査例では多肥松林遺跡、日暮・松林遺跡が10数棟のまとまった住居跡と河川廃棄の遺物群を伴出するが、そのほかでは大規模な集落を想定させるような状況ではなく、平野全体からみれば質量ともに希薄な時期である。

中期後半も遺跡数としては中期前半に引き続いて希薄である。周辺丘陵部では前田東中村遺跡⁽¹⁶⁾、久米池南遺跡⁽¹⁷⁾、中山田遺跡（池田町）⁽¹⁸⁾等があるが、平野部では浴・長池遺跡、上天神遺跡、空港跡地遺跡が知られるのみである。

弥生時代後期になると、遺跡の状況は一変し、天満・宮西遺跡、上天神遺跡、凹原遺跡、空

港跡地遺跡のような10数棟の住居跡と大量の廃棄土器を伴う集落が各地に営まれ、そのほかにも平野部山間部を問わずに遺跡数が一気に増加するのである。前述の遺跡の他に代表的なものとしては、平野部では太田下須川遺跡（太田下町）⁽¹⁹⁾、蛙股遺跡（伏石町・太田下町）、居石遺跡、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、林・坊城遺跡、六条上所遺跡（六条町）⁽²⁰⁾、松縄下所遺跡、キモンドー遺跡（伏石町）⁽²¹⁾、一角遺跡⁽²²⁾等が知られている。

古墳時代は、集落遺跡では太田下須川遺跡、水田、旧河道では浴・松ノ木遺跡、居石遺跡が知られるのみである。その一方で古墳は、発生期と考えられる諏訪神社本殿古墳（東山崎町）⁽²³⁾、鶴尾神社4号墳（西春日町）⁽²⁴⁾をはじめとして平野周辺の丘陵上に、古墳時代の全期間にわたって継続的に展開しており、今後これらに対応する集落の確認が課題となる。古墳の中で、平野部に独立して立地するものに木太町の白山神社古墳⁽²⁵⁾がある。豊穴式石室を主体部とする円墳で、5世紀前半頃の築造と推定されている。古墳の標高約2mを測り、これまで当時の海岸線と推定されている標高5mラインよりも低位にあるため、古墳時代の高松平野の地形環境に再考を促すという面でも注目される遺跡である。

古代では、条里遺構と古代寺院跡が注目される。

高松平野の条里分布は、平野南縁部を東西に貫く南海道とこれに直交する山田・香川両郡の直線郡界線を基準に敷設されたことが知られている。これらは、最近までは用水路、里道、水田区画によっても容易に復原できたが、今日急速にその姿を失いつつある。

その一方で条里遺構の確認例は増加し、浴・長池遺跡、浴・松ノ木遺跡、井手東Ⅰ遺跡、蛙股遺跡、上天神遺跡、凹原遺跡、等で条里坪界線にあたると思われる遺構を検出している。同様に浴・長池Ⅱ遺跡では、山田・香川の郡界線にあたる部分に約6mの間隔を置いて平行する2本の溝状遺構を検出しているほか、松縄下所遺跡では南北200mにわたって貫通する道路状遺構と3ヶ所の交差点が条里区画に重なっていることが明らかになった。これらの成果には、弘福寺領讃岐国山田郡田図をはじめ弘福寺関係文書等の文献方面からの研究に負うところが大きいが⁽²⁶⁾、埋蔵文化財の立場でもようやくこういった種類の遺跡が調査の対象として定着してきた結果である。これら条里遺構の多くは平安時代から鎌倉時代の遺物を含み、一般に条里の施行期とされる奈良時代とはかなりの時期の隔たりがあるが、蛙股遺跡、松縄下所遺跡のように奈良時代を中心とした遺物の出土をみた遺跡もあり、条里地割の施行時期と存続期間を解明できるデータが揃いつつある。

古代寺院跡では宝寿寺跡（前田廃寺－前田東町）⁽²⁷⁾、山下廃寺（新田町）⁽²⁸⁾、下司廃寺（東植田町）⁽²⁹⁾、高野廃寺（川島本町）⁽³⁰⁾、拝師廃寺（上林町）⁽³¹⁾、坂田廃寺（西春日町）⁽³²⁾、多肥廃寺（多肥上町）⁽³³⁾、勝賀廃寺（香西西町）⁽³⁴⁾等が平野部を中心に知られている。正式の発掘調査を経たデータがないため、寺域、伽藍等の全容がわかるものはないが、現在でも礎石や遺物の散布が



第4図 遺跡分布図 (1 : 50,000)

見られる。なかでも下司廃寺の川原寺式複弁八葉蓮華文軒丸瓦や三尊像博仏片、坂田廃寺の金銅製釈迦誕生仏が注目され、山田郡弘福寺領の存在とも合わせて白鳳から奈良平安時代に中央政府と深い関係を持っていたことが想像できる。

中近世以降では、東道路関連の浴・長池遺跡、浴・松ノ木遺跡、弘福寺領讃岐国山田郡田岡北地区比定地（木太町・林町）等で、旧河道の埋没後の凹地に中世の小規模な区画の水田層が出土しており、その後現代に至るまで連続して水田層の堆積が見られることから、この時期に現在の地形環境がほぼ形作られていたことが窺える。また東山崎・水田遺跡（東山崎町）⁽³⁵⁾では春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた集落跡や耕土層が発掘され豊富な木製品が発見されているほか、現高松市美術館の紺屋町遺跡（紺屋町）⁽³⁶⁾でも近世の陶磁器や木簡（荷札木片）が出土し、玉藻町香川県民ホールの高松城東ノ丸跡（玉藻町）⁽³⁷⁾でも寛永年間の東ノ丸造営以降の石垣や建物礎石の遺構が出土し、往時の城下町の一端を窺うことができる。

参考文献

- (1) 浜田重人 『高松市木太町大池遺跡表採の有舌尖頭器』「香川考古」第2号 香川考古刊行会 1994
- (2) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成4年度 香川県教育委員会 1993
- (3) 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 林・坊城遺跡」 香川県教育委員会他 1993
- (4) 「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二冊 浴・松ノ木遺跡」 高松市教育委員会 1994
- (5) 「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第一冊 浴・長池遺跡」 香川県教育委員会 1993
- (6) 「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三冊 浴・長池Ⅱ遺跡」 高松市教育委員会 1994
- (7) 中西克也 「讃岐国弘福寺領の調査 第2章第3節」 高松市教育委員会 1993
- (8) 山元敏裕 「讃岐国弘福寺領の調査 第2章第3節」 高松市教育委員会 1993
- (9) 「香川県埋蔵文化財調査年報」昭和59年度～昭和62年度 香川県教育委員会 1988
- (10) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成元年度 香川県教育委員会 1990
川畑聰 「讃岐国弘福寺領の調査 第2章第3節」 高松市教育委員会 1993
- (11) 「空港跡地遺跡発掘調査概報」平成3年度 香川県教育委員会他 1992
「空港跡地遺跡発掘調査概報」平成4年度 香川県教育委員会他 1993
「空港跡地遺跡発掘調査概報」平成5年度 香川県教育委員会他 1994

- (12) 山本英之 「讃岐国弘福寺領の調査 第2章第3節」 高松市教育委員会 1993
- (13) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成2年度 香川県教育委員会 1991
川畠聰 「讃岐国弘福寺領の調査 第2章第3節」 高松市教育委員会
- (14) 「多肥松林遺跡発掘調査概報」平成5年度 香川県教育委員会 1994
- (15) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成5年度 香川県教育委員会 1994
- (16) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成元年度 香川県教育委員会 1990
「香川県埋蔵文化財調査年報」平成2年度 香川県教育委員会 1991
- (17) 「久米池南遺跡発掘調査報告書」 高松市教育委員会 1989
- (18) 「新編香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 昭和58年
- (19) 「香川県埋蔵文化財調査年報」昭和63年度 香川県教育委員会 1988
「香川県埋蔵文化財調査年報」平成元年度 香川県教育委員会 1989
「香川県埋蔵文化財調査年報」平成2年度 香川県教育委員会 1990
- (20) 「香川県埋蔵文化財調査年報」昭和63年度 香川県教育委員会 1988
- (21) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成5年度 香川県教育委員会 1994
- (22) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成5年度 香川県教育委員会 1994
- (23) 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成2年度 香川県教育委員会 1991
- (24) 「鶴尾神社4号墳調査報告書」 高松市教育委員会 1983
- (25) 「三谷石船古墳測量調査報告書」 高松工芸高校郷土史研究会 1992
「高松の古代文化」 高松市立図書館 昭和63年
- 山本英之 『白山神社古墳』「香川考古」第3号 香川考古刊行会 1995
- (26) 「弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報」I~IV 高松市教育委員会 1988~
1990・1992
「讃岐国弘福寺領の調査~弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書~」 高松市教育委員会
1992
- (27) 木田郡史編纂部「木田郡誌」 木田郡教育部会 1940
「高松の古代文化」 高松市立図書館 昭和63年
- (28) 「古高松郷土史」 古高松郷土誌編集委員会 1977
安藤文良『讃岐古瓦図録』「文化財協会報」特別号8 香川県文化財保護協会 昭和42年
- (29) 「新編香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 昭和58年
大平要『下司廃寺出土の埴仏片について』「瀬戸内海歴史民俗資料館だより」創刊号
1975
- (30) 安藤文良『讃岐古瓦図録』「文化財協会報」特別号8 香川県文化財保護協会 昭和42年

- 「高松の古代文化」 高松市立図書館 昭和63年
- (31) 「高松の古代文化」 高松市立図書館 昭和63年
- (32) 「復刻版史跡名勝天然記念物調査報告（上巻）」 香川県文化財保護協会 昭和50年
「新編香川叢書 考古編」 香川県教育委員会 昭和58年
- (33) 「多肥郷土史 後編」 多肥郷土史編集委員会 1981
「高松の古代文化」 高松市立図書館 昭和63年
- (34) 「高松の古代文化」 高松市立図書館 昭和63年
- (35) 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 東山崎・水田遺跡」 香川県
教育委員会他 1992
- (36) 「高松城東ノ丸跡発掘調査報告書」 香川県教育委員会 1987
『1988年出土の木簡 香川・紺屋町遺跡』「木簡研究」第11号 木簡学会 1989
- (37) 「高松城東ノ丸跡発掘調査報告書」 香川県教育委員会 1987

遺跡分布図地名表

1 鶴尾神社 4号墳	12 上天神遺跡	25 空港跡地遺跡
2 坂田廃寺	13 太田下須川遺跡	26 一角遺跡
3 高松城東ノ丸跡	14 蛙股遺跡	27 拝師廃寺
4 紺屋町遺跡	15 居石遺跡	28 多肥廃寺
5 天満・宮西遺跡	16 井手東Ⅱ遺跡	29 高野廃寺
6 白山神社古墳	17 井手東Ⅰ遺跡	30 山下廃寺
7 松縄下所遺跡	18 浴・長池Ⅱ遺跡	31 諏訪神社本殿古墳
8 キモンドー遺跡	19 浴・長池遺跡	32 久米池南遺跡
9 大池遺跡	20 浴・松ノ木遺跡	33 宝寿寺跡（前田廃寺）
10 弘福寺領関係遺跡発掘 地点北地区	21 林・坊城遺跡	34 前田東中村遺跡
11 弘福寺領関係遺跡発掘 地点南地区	22 六条・上所遺跡	
	23 東山崎・水田遺跡	
	24 凹原遺跡	

第 3 章

発掘調査の成果

第1節 調査区の設定

平成2・3年度に調査を行った井手東Ⅱ遺跡の調査区の設定は、平成2年7月30日から8月24日にかけて行った試掘調査の成果に基づいて設定した。(第5図) 一部試掘調査に入れないと箇所も存在したが、試掘調査の結果、遺構の確認された13、14Trを中心とし、当初、東西50m、南北は道路建設予定幅いっぱいの42mの調査区を設定して調査を行った。(一次調査) 調査が進んだ段階で、用地交渉等で試掘調査ができていない調査区の東側へ遺構が延びる可能性が想定されたため、用地交渉が済んだ段階で遺構が広がる可能性の高い部分を中心に、調査区北東部を三角形に東側へ20m拡張し、残りの調査を行った。(二次調査)



第5図 調査区設定図

第2節 遺跡の概要と層序

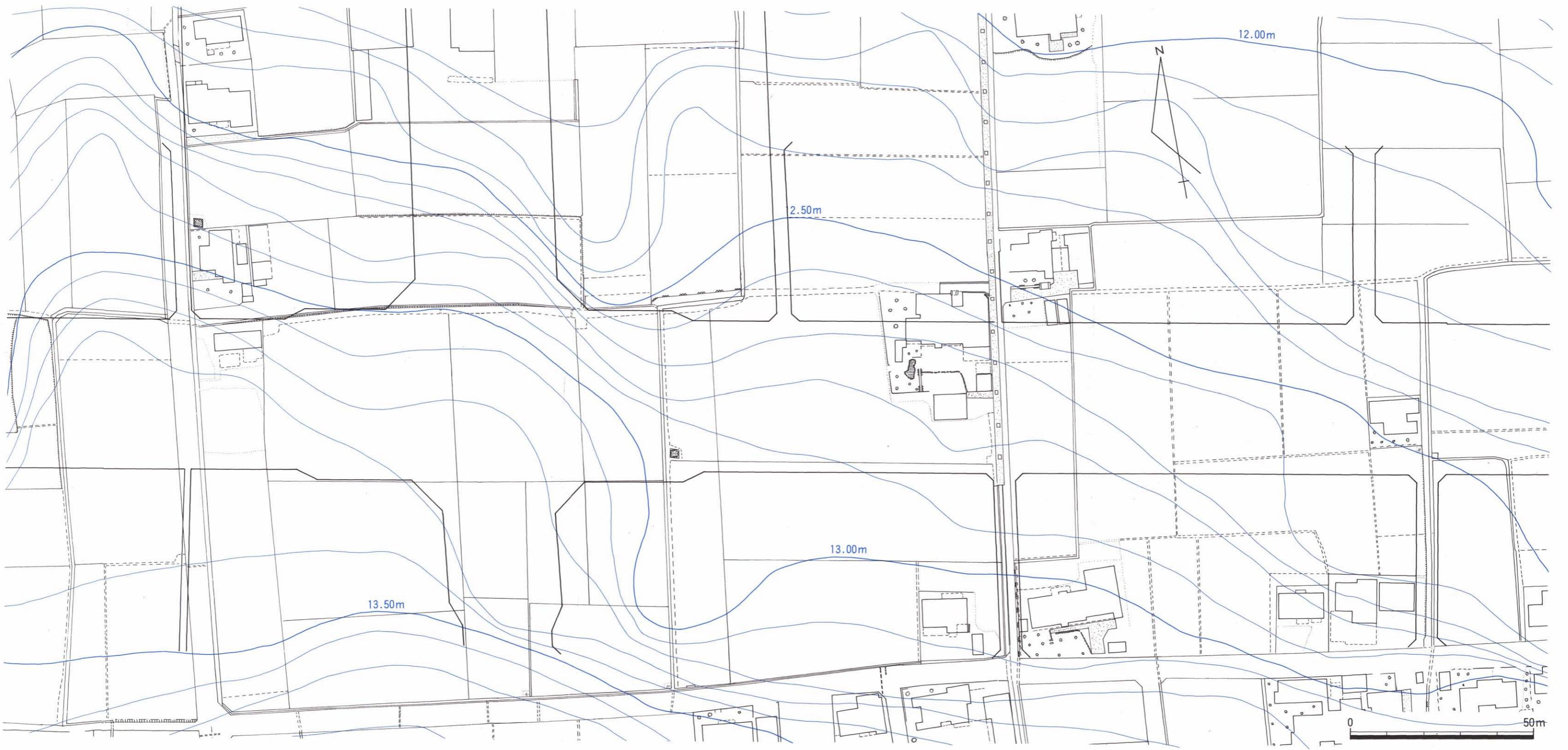
1 遺跡の概要

本遺跡の所在する地区は、現在まで水田として耕作されていたところであり、周辺にも水田が広がっていた。地形的には、大きくみて南西から北東方向に向かって緩やかに下る地形であり、遺跡周辺の標高は13.20m前後である。細かく地形をみてみると、遺跡の約100m西側は、現水田面が次第に低くなっている。旧河道の存在が想定され、実際、発掘調査によって旧河道が確認されている。逆に本遺跡より以東は微高地となっていることより、遺構の存在が想定されたが、調査区の東接部には建設廃材の置き場となっており、攪乱が遺構の存在する基盤層より深く及んでいた。

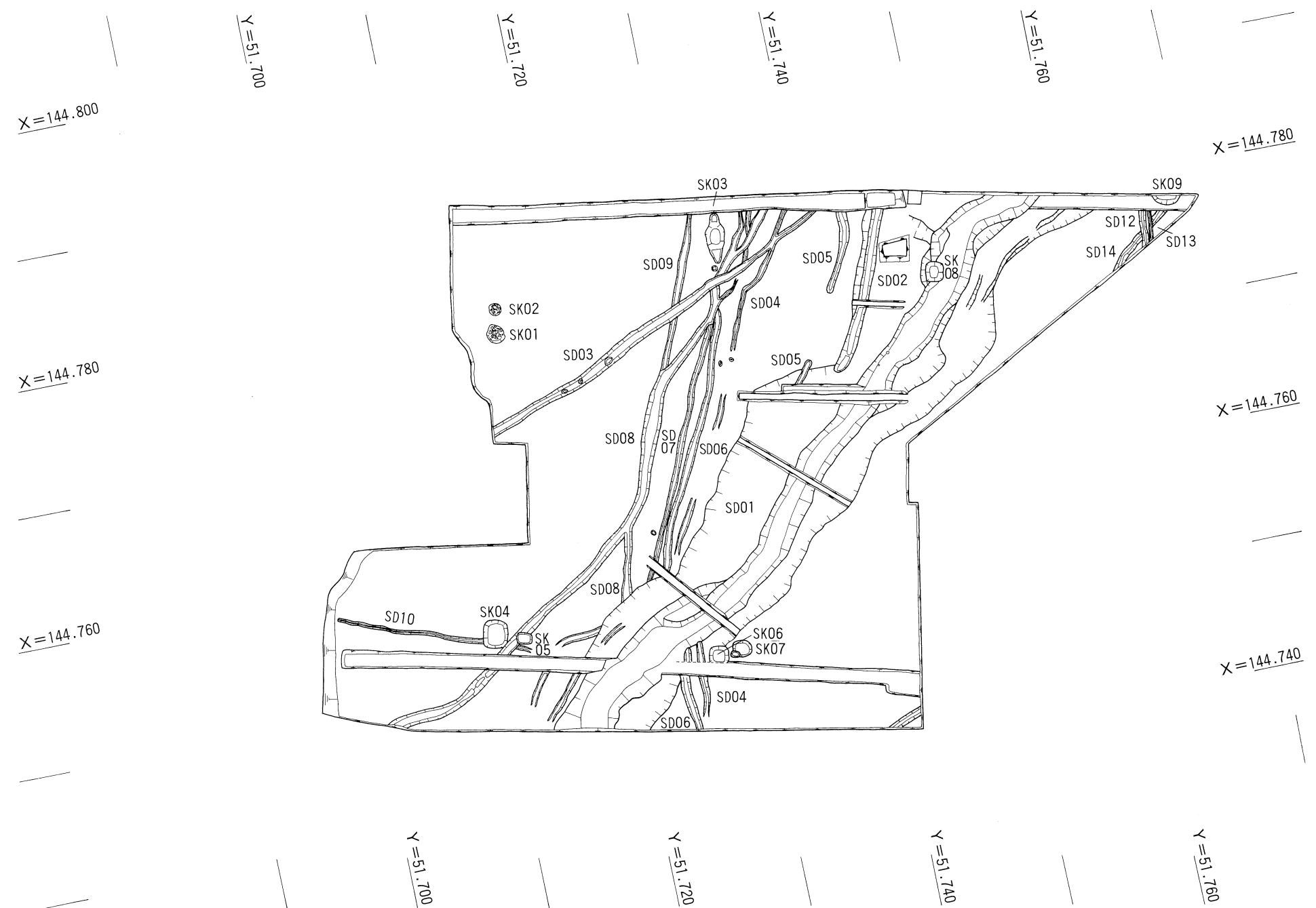
本遺跡で検出した遺構は、溝14、土坑9、ピット7である。遺物を伴った遺構が少ないとめ正確な時期の判るものは少ないが、縄文時代晚期～弥生時代前期を中心とする遺構と、近世以降と考えられる遺構の大きく二つに分かれる。遺構検出面の標高は12.8～12.9mであり、調査区内ではほぼ平坦である。検出した溝は、地形の傾斜と合うように南西から北東に走っており、遺構の広がりは、SD01～10は調査区の中央部に集中し、SD11～14は調査区の東側にある。土坑、ピットは調査区全域に散在している。

2 基本層序

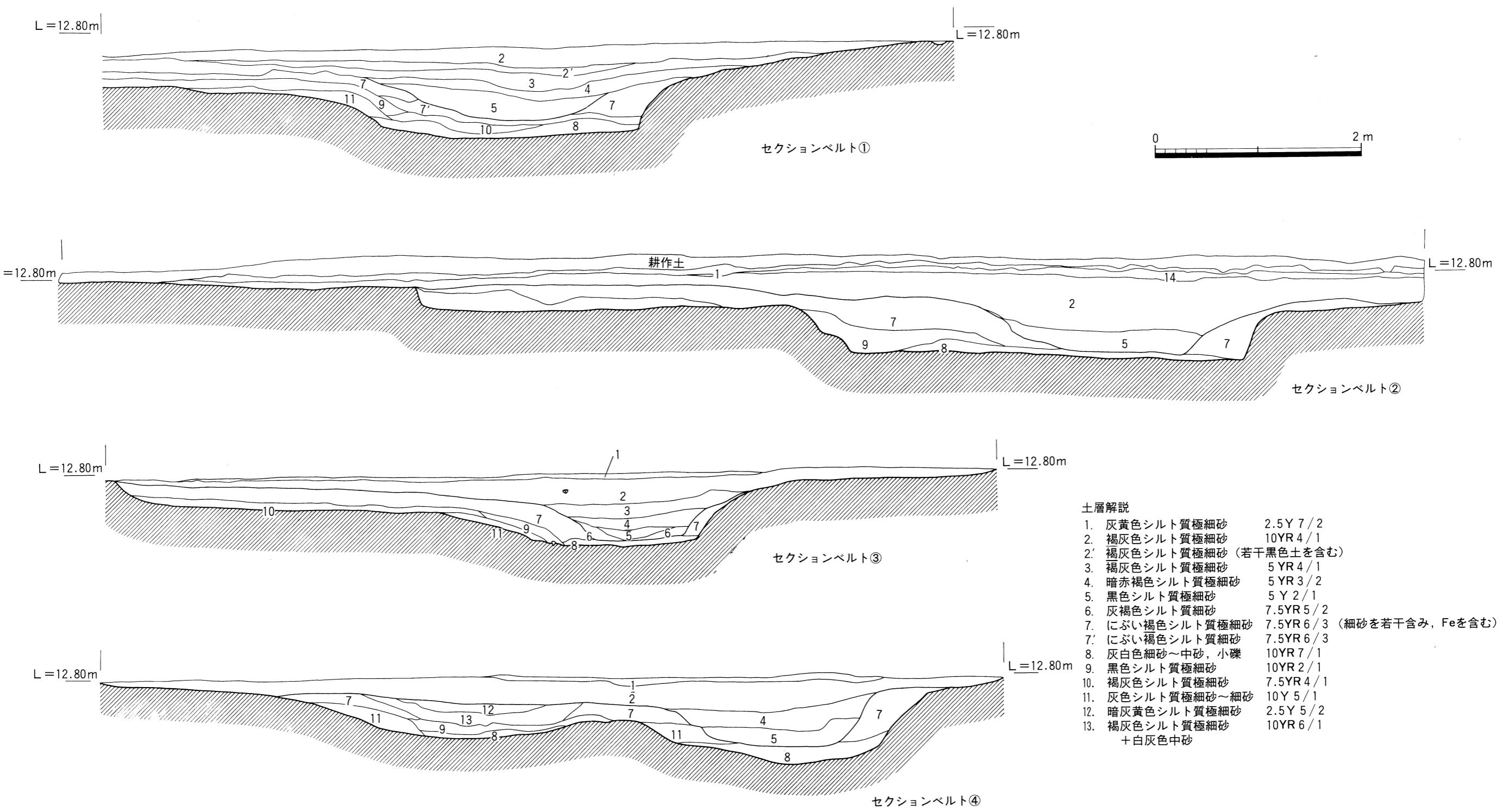
地表から約20cm現水田耕作土であり、その直下には部分的に2、3cmの床土がみられる。床土には褐鉄鉱の集積がある。その下位には白灰色シルト質極細砂の土壤層と明褐色シルト質極細砂の非土壤層が交互に数層堆積している。これらは近世の条里型水田であり、非土壤層には褐鉄鉱の集積がみられる。さらに、その直下は遺構を検出すことができた基盤層となっている。基盤層は、調査区の東側と西側で異なっている。東側では明黄褐色シルトであり、従来地山と考えられていた層である。西側は砂礫を含むにぶい黄橙色極細砂である。



第6図 井手東Ⅱ遺跡周辺微地形図



第7図 井手東Ⅱ遺跡遺構配置図



第8図 SD01土層図

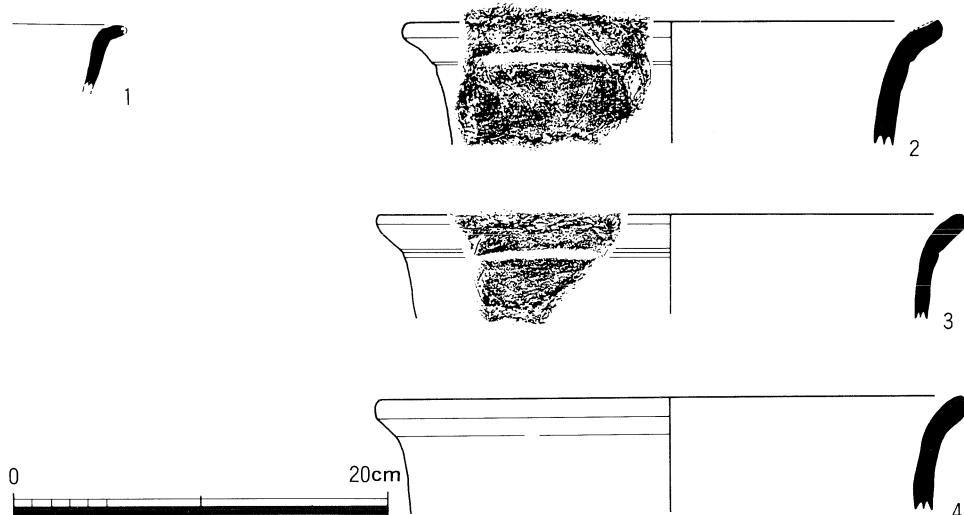
第3節 縄文・弥生時代の遺構と遺物

SD01（第8図）

調査区南壁の中央から北東隅にかけて検出された幅広の溝である。土層観察によってその埋土の堆積は2層に分けられるが、出土土器から判断する限り殆ど時期差をおかずに埋積したものと考えられる。

(I期) 調査区の中央から北東にかけて検出された。流れの方向は北東である。幅は最大11.5m、最も狭い部分では6.5mを測る。深さは約0.7mである。溝の断面は中央が急激に落ち込み、両岸は緩やかに傾斜し、段を有している。底面は幅が狭くなっている。南北両端の比高差は約20cmを測る。埋土は水平堆積を呈しており、最上層に灰黄色シルト質極細砂が薄く、その下層には褐灰色シルト質極細砂が厚く広範に堆積している。中央の急激に落ち込む部分には褐灰色、暗赤褐色、黒色シルト質極細砂が堆積し、最下面の両側に褐灰色シルト質細砂がある。

(II期) 溝の規模・方向ともにI期と同様であるが、底面の幅が広くなっている。1～2.5mを測る。深さもI期より10～20cm深い。底面はほぼ平坦で、南から北に緩やかに低くなっている。埋土は、上から暗灰黄色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂+白灰色中砂、にぶい褐色シルト質極細砂、黒色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂、灰色シルト質極細砂～細砂、そして最下面に灰白色細～中砂=礫が堆積する。



第9図 SD01 (I期) 出土土器実測図

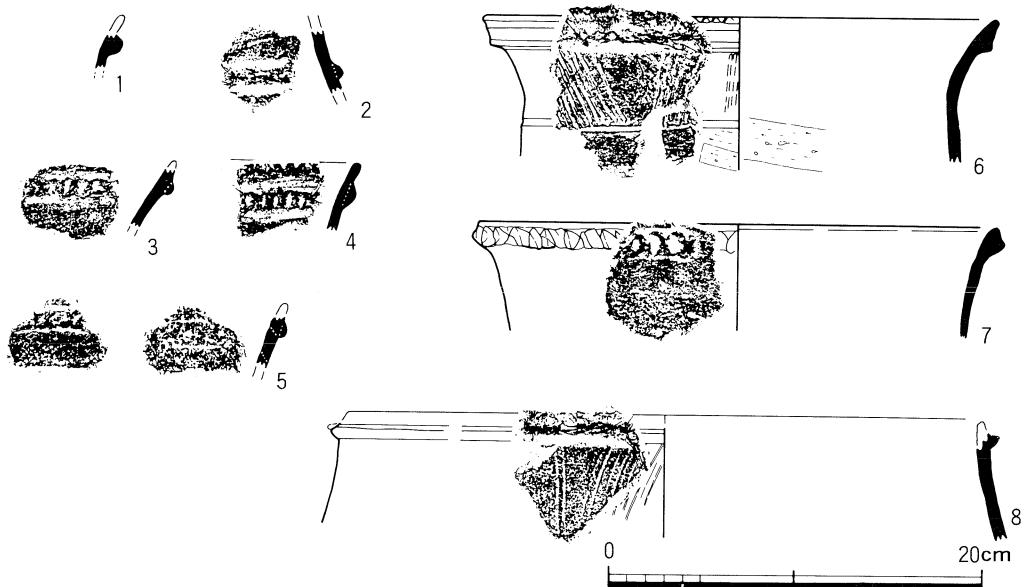
I期出土土器（第9図）

I期はII期に比べ、遺物量は少なく、図化できたのは4点である。1は如意状口縁をもつ甕である。2～4は壺である。いずれの壺も口縁部下に段をもつが、2、3は明瞭で4は不明瞭である。調整は内外面ともヨコナデを施す。

II期出土土器（第10・11図）

SD01 II期の流路からは、縄文時代晚期の土器と弥生時代前期の土器が混在した状態で出土している。以下に縄文時代の土器と弥生時代前期の土器を分けて説明する。

第10図1～8は縄文時代晚期の深鉢と考えられるものである。1は小片であるが、断面台形の刻目突帯文をもつものである。2は口縁部近くに断面三角形の突帯文をもつものであるが磨滅が顕著で刻目は確認できない。3は口縁端部を欠損するもので、端部近くに断面台形の刻目突帯文をもつ。内面は磨滅が著しい。4は口縁端部に刻目、外面に断面台形の刻目突帯文をもつが、他のものに比べ突帯の位置がやや低い。5は口縁端部を欠損するもので、断面台形の刻目突帯をもち、刻目の幅は狭い。内面には、粘土紐の接合痕が顕著に残る。6は口縁部から屈曲部までの状況がわかる比較的大きな破片である。口縁端部に刻目、外面に刻目突帯文を施し、頸部に範描文、屈曲部に一条の沈線を施す。口縁部内外面ヨコナデ、下半内面ヘラケズリ、外



第10図 SD01 (II期) 出土土器実測図(1)

面条痕。7は口縁部外面に断面三角形の刻目突帯文を施すが、刻目の間隔は他のものに比べ広く、刻目も大きい。調整は内外面ともヨコナデである。8は口縁端部を欠損する破片で、内面に断面三角形の突帯文を施す。磨滅が著しく刻目は確認できない。文様は、頸部に籠描文を施す。調整は内外面ともヨコナデであろう。

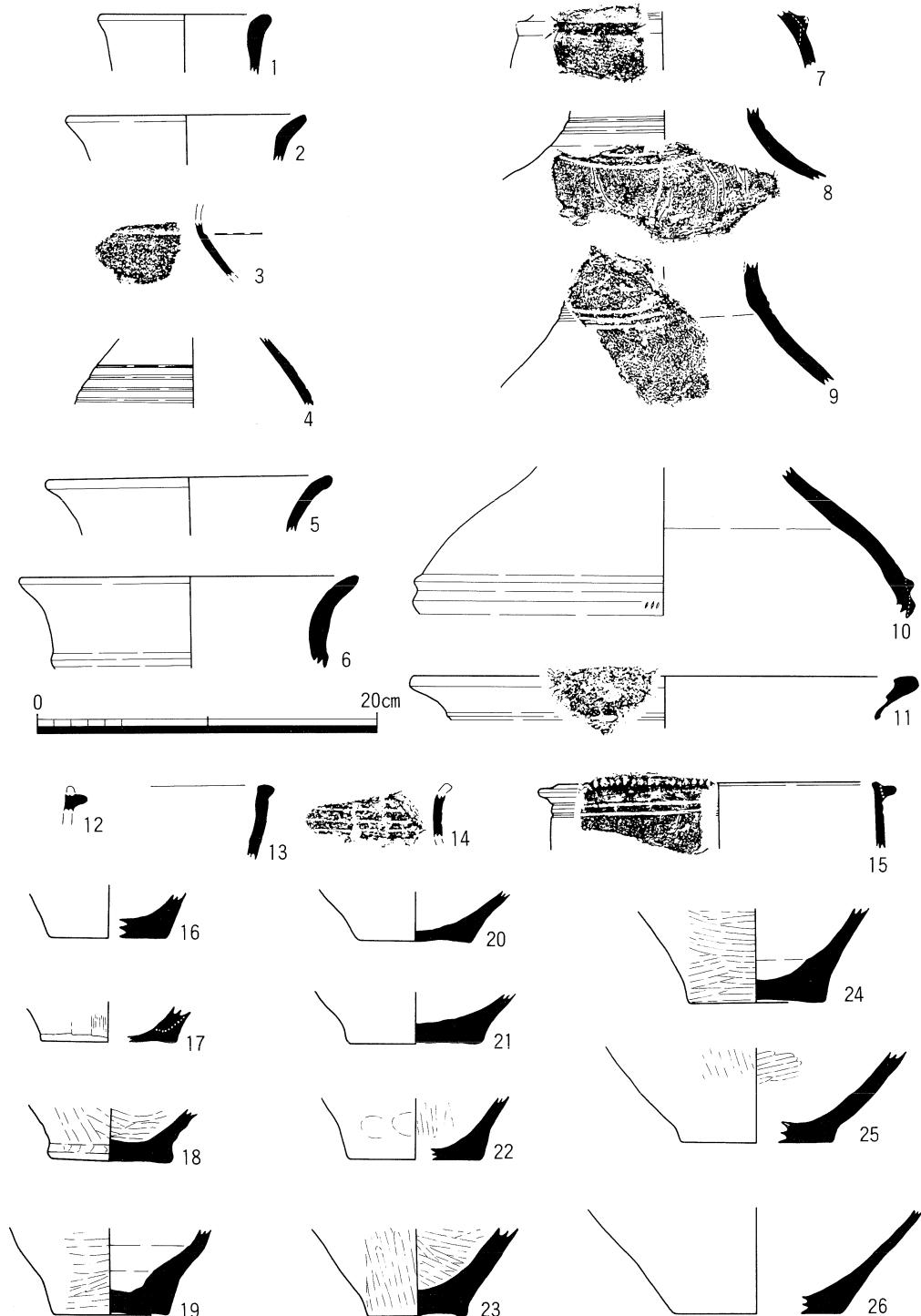
第11図1～26は弥生時代前期に属する土器である。

第11図1～11は壺である。いずれも破片で全容のわかるものはない。

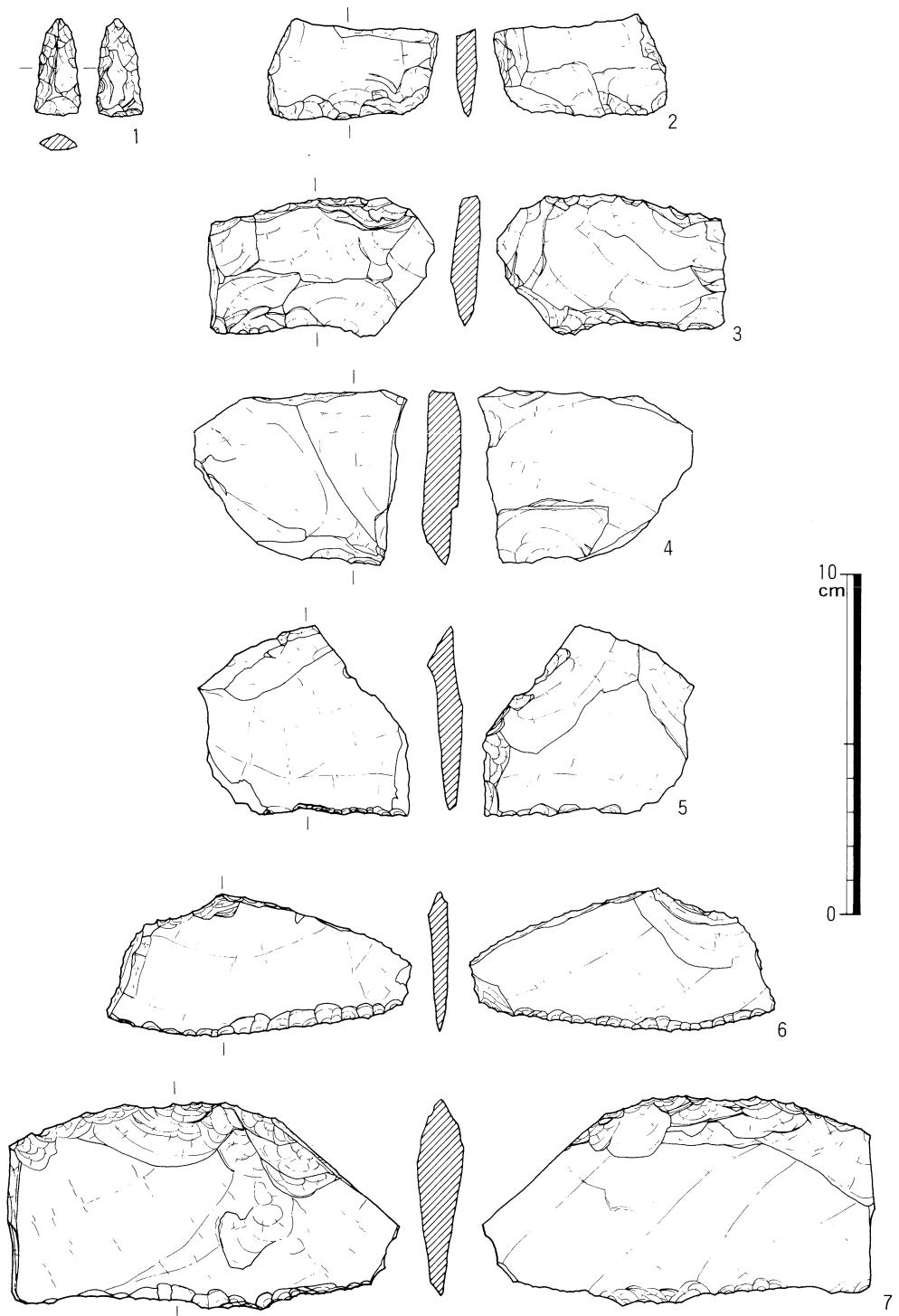
1は口縁端部が外反するもので、やや器壁が厚い。調整は内外面ヨコナデを施す。2も口縁部片であるが、磨滅が著しい。3は肩部片で、段を有する。器壁は薄くつくられている。4も肩部片である。4条の籠描沈線文が確認できる。5、6は口縁部が外反する破片である。いずれの破片も磨滅の為、調整は不明である。7は肩部に断面三角形の突帯文を一条巡らせるもので、突帯文に刻目は確認できない。調整は内外面ともヨコナテである。8、9は、いずれも頸部から肩部片である。頸部と肩部の境に8は3条、9は4条の籠描沈線文を巡らせる。調整は内外面ともヨコナデである。10は胴部片である。ソロバン玉型の胴部の形態をするものと考えられ、胴部最大径になる部分に刻目突帯文を2条巡らす。11は口縁部片であり、口縁部下に籠描沈線文1条が確認できる。12～15は甕である。12、13、15は逆L字状口縁と考えられるものでうち15は口縁下に籠描沈線文2条、口縁端部に刻目を施す。16～26は壺の底部と考えられるものである。底部は平底のものが大半で、あげ底についても僅かにあげる程度である。調整は内外面はヘラミガキを主流とし、内外面ナデ調整をもつものもみられる。

Ⅱ期出土石器（第12・13図）

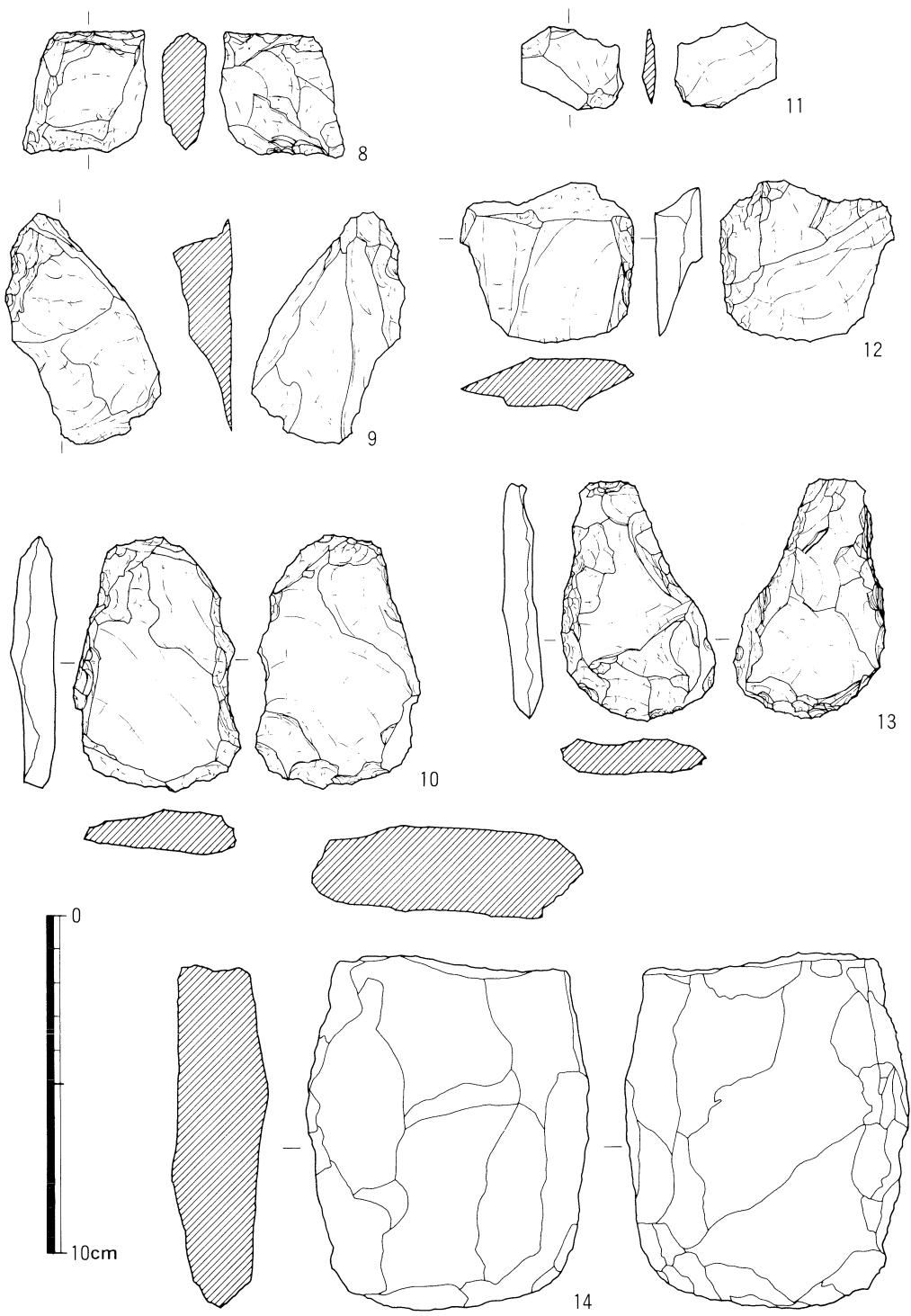
SD01（Ⅱ期）からは出土土器と同様、縄文色の強い石器が多く出土している。1は平基式の石鎌である。両側縁部は鋭利につくられている。2～7は削器である。2は下縁部に明瞭な調整をもつものである。3は下縁部の調整は鋭利で、上縁部の調整は粗い。4は下縁部以外は裁断面を残す。下縁部付近に使用によるものと考えられる磨滅が認められる。5は下縁部のみに調整が認められるものである。6は下縁部以外は自然面を残すもので、下縁部は両面からの調整により鋭利に仕上げられている。7はやや厚めの素材を使用するもので、背部は敲打による背潰しが認められ、刃部は両面からの調整が行われている。素材はやや風化が進む。8は楔形石器である。厚めの素材を利用し、両側縁部に裁断面をもつ。上下縁部は打撃による階段状剥離が認められる。9～14は打製石斧（石鎌）である。9は大半を欠損し、一部側縁部を残すのみである。10は撥型を呈するものであるが、調整は粗い。11は先端部片である。残存する先端部に使用による擦痕が認められる為、石鎌と考えた。12は先端部を欠損し、基部が残るのみである。側縁部の調整は粗い。13は撥型を呈するもので、比較的残りがよいものである。側縁部の調整は粗く仕上げられている。先端部付近には、使用による擦痕が認められる。14は厚めの



第11図 SD01(Ⅱ期)出土土器実測図(2)



第12図 SD01（Ⅱ期）出土石器実測図(1)

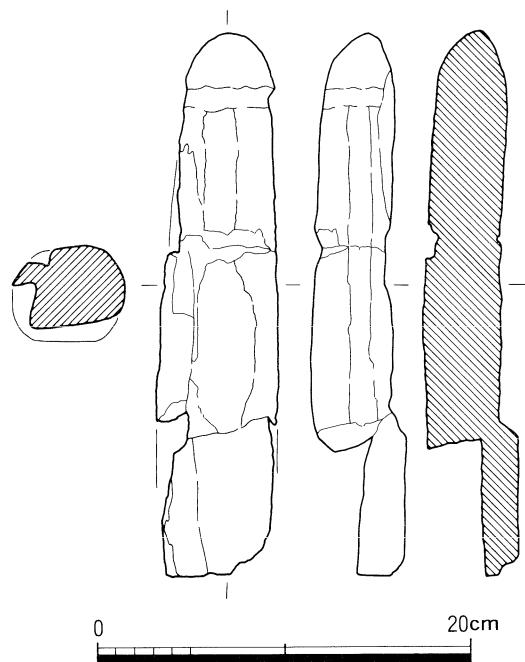


第13図 SD01 (Ⅱ期) 出土石器実測図(2)

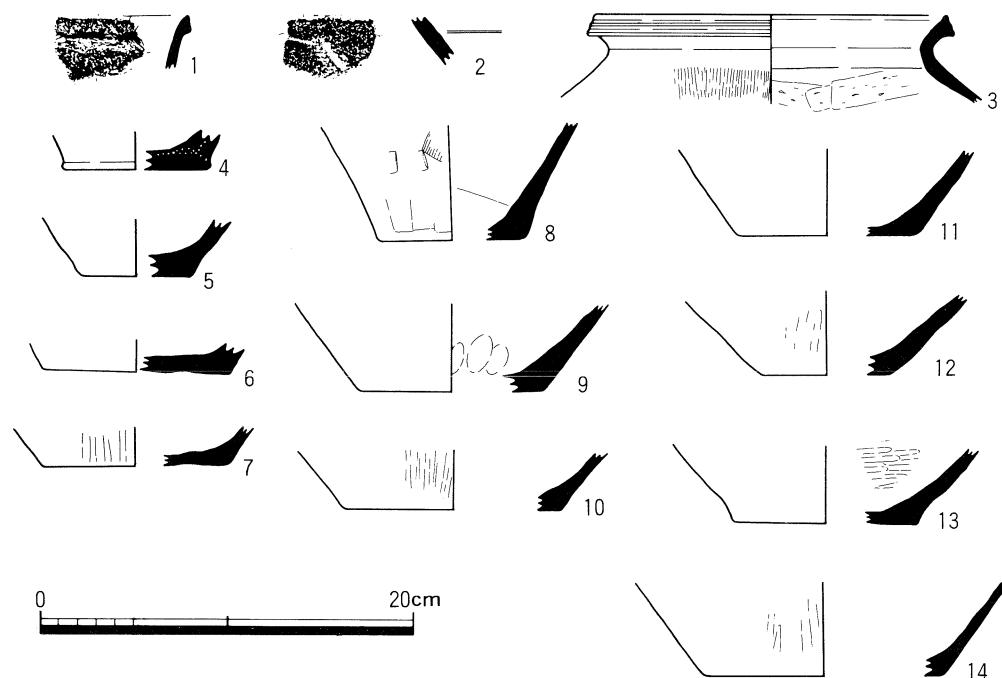
素材を使用するもので、形態から石鉤とした。調整は粗い。15は石棒であるⅡ期の溝中から破碎された状態で出土したものをつなぎ合わせた結果、全長29.0cm、最大幅6.5cmまで復原できた。基部の状況からすれば、当初はこれよりも大きかったものと考えられる。先端部は基部に比べ先細りし、先端から3.0cm付近でくびれ、先端部を強調している。石材は結晶片岩を使用し、つくりは丁寧である。

SD01上層部出土遺物（第15図）

1は突帯文をもつ深鉢である。全体に磨滅が著しい。2は肩部に段をもつ壺である。3は甕である。口縁部外面に2条の凹線文を巡らす。体部上半ハケ、内面頸部近くまでヘラケズリが認められる。4～14は底部である。8は甕、それ以外は壺の底部であると考えられる。



第14図 SD01（Ⅱ期）出土石棒実測図



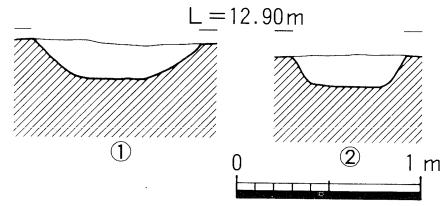
第15図 SD01出土土器実測図

SD02

調査区の北側ほぼ中央において、SD01の西岸とほぼ平行する方向で検出された。検出全長約13m、幅約0.8m、深さ24.0cm、底面の幅は約0.4cmを測る。断面U字形を呈する。埋土はSD01の第2層褐灰色シルト質極細砂と同一である。出土遺物はないが、埋土からSD01と同時期と考えられる。

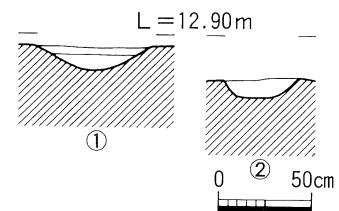
SD03（第16図）

調査区北側に検出された溝である。検出長約30.5mを測り、南北とも調査区外へ伸びている。流れの方向は北北東である。幅は北へ向かうにしたがって細くなり、0.3~1mを測る。深さは18cmで、断面U字形を呈する。底面の幅は15~40cmで、3ヶ所にピット状の落ち込みがある。SD04・06~09を切っており、検出された溝の中で最も新しい時期のものであると考えられる。



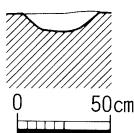
SD04（第17図）

調査区ほぼ中央に途切れながら検出された。方向はほぼ南北で、SD06と平行している。幅は40cm、深さ10cmを測る。底面の幅は20cmで、断面U字形を呈する。埋土は暗褐色シルト質極細砂である。切り合い関係によって、SD01より新しくSD03より古いと考えられる。



SD05（第18図）

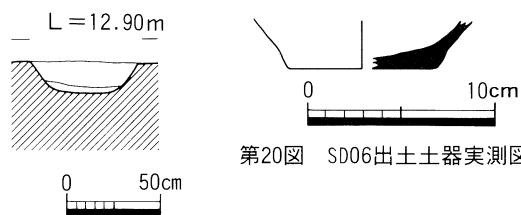
L = 12.90m 調査区の北半のみに検出された。流れの方向は北東で、北は調査区外に伸びる。幅約0.4m、深さ0.1mを測る。底面幅は18cmで、断面は浅いU字形を呈する。埋土は暗褐色シルト質極細砂である。



SD06（第19図）

調査区のほぼ中央においてSD04・07と平行して検出された。北端はSD08に切られており、南端は調査区外に伸びている。

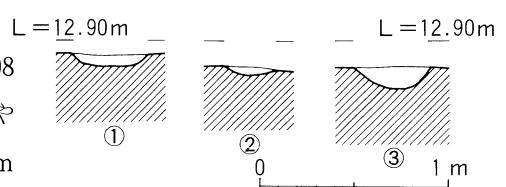
幅0.6m、深さ10~18cmを測り、底面幅は20cmである。断面は浅いU字形を呈し、底面のレベルは北に向かって緩やかに低くなっている。埋土は黒褐色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂+細砂の2層である。



第19図 SD06土層図

SD07（第21図）

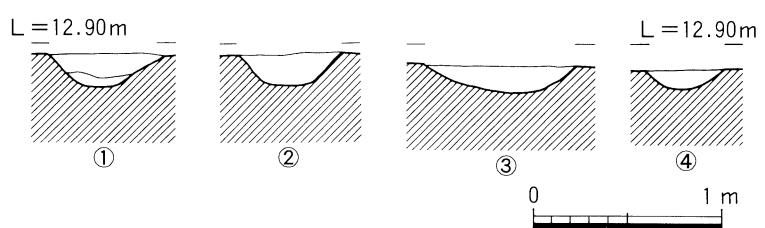
調査区のほぼ中央において検出された。北端はSD08によって切られ、SD06と平行しているが、南側はやや方向を西に変える。幅0.3~0.4m、深さ0.04~0.12mであり、断面は浅いU字形を呈する。底面の幅は0.1mで、北側にいくにしたがい緩やかに低くなる。埋土は暗褐色シルト質極細砂である。



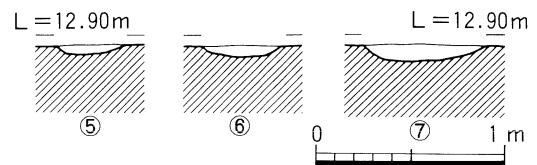
第21図 SD07土層図

SD08（第22・23図）

調査区の南西から北辺中央にかけて検出された。南北とも分流しており調査区外に延びている。幅0.4~1.3m、深さ0.1~0.2mを測る。断面はU字形を呈し、底面の幅0.1~0.7mである。埋土は暗褐色シルト質極細砂、黒褐色シルト質極細砂、褐灰色シルト質極細砂である。切り合い関係は、SD06・07・09・10を切っているが、SD04・05によって切られている。



第22図 SD08土層図(1)



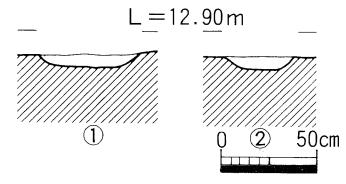
第23図 SD08土層図(2)



第24図 SD08出土土器実測図

SD09（第25図）

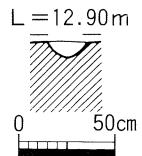
調査区北側ほぼ中央において検出された。南端はSD08によつて切られている。幅0.35～0.56m、深さ0.1mであり、非常に浅い溝である。断面は浅いU字形を呈し、底面の幅0.2～0.35mである。埋土は暗褐色シルト質極細砂である。切り合い関係はSD03と08に切られている。



第25図 SD09土層図

SD10（第26図）

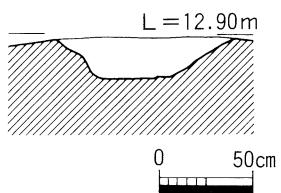
調査区の南西において検出された。溝の方向は東西方向である。幅0.2m、深さ0.1mを測る。断面はU字形を呈し、底面の幅0.1mである。埋土は黄灰色シルト質極細砂である。SD08、SK04によって切られている。



第26図 SD10土層図

SD11（第27図）

調査区の南東隅において検出された。幅0.6m、深さ0.2mである。断面はU字形を呈し、底面の幅0.2mである。埋土は暗赤褐色シルト質極細砂である。南北端ともに調査区外に延びている。



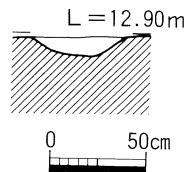
第27図 SD11土層図

SD12

調査区の北東隅において検出された。SD13と平行している。方向は南北方向であり、調査区外に延びている。幅0.5m、深さ0.06mを測る。断面はU字形を呈し、底面の幅0.2mである。埋土は白灰色シルト質極細砂である。この溝はSD14を切っている。

SD14（第28図）

調査区の北東隅において検出された。溝の方向は北東－南西であり、幅0.5m、深さ0.1mを測る。断面はU字形を呈し、底面の幅0.15mである。埋土は灰黄褐色シルト質極細砂である。この溝はSD12・13に切られている。



第28図 SD14土層図

SP01

調査区中央やや南よりにおいて検出された。径0.4mの円形を呈し、深さはほとんどない。埋土は暗褐色シルト質極細砂である。

SP03

調査区中央やや北よりにおいて検出された。平面形は円形であり、 0.25×0.4 mを測る。深さはほとんどない。埋土は暗褐色シルト質極細砂である。

SP04

調査区中央やや北より、SP03の東側において検出された。平面形は、径0.25mを測る円形である。深さはほとんどなく、埋土は暗褐色シルト質極細砂である。

SP06

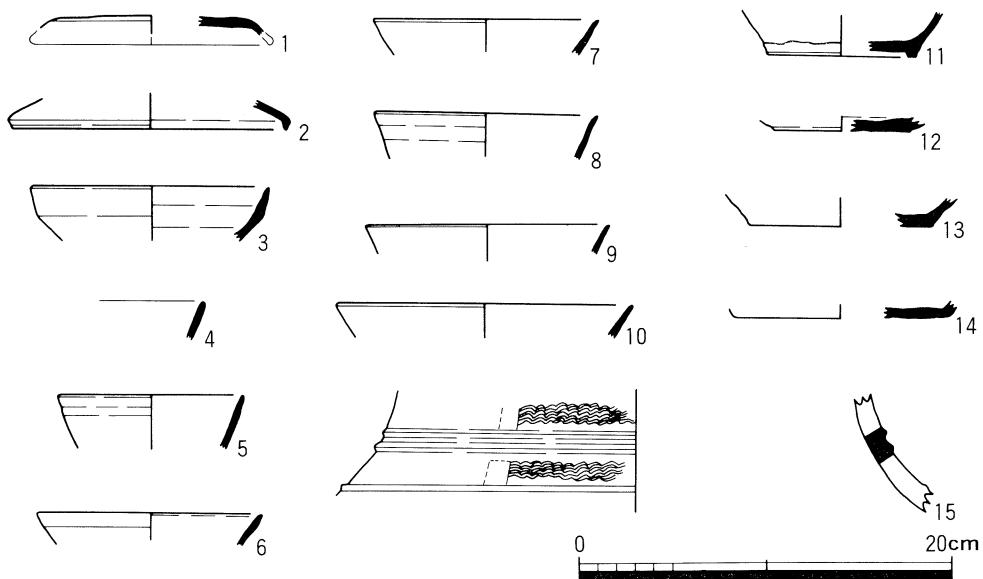
調査区の北東隅において検出された。平面形は円形であり、径0.3m、深さ0.1mを測る。埋土は暗褐色シルト質極細砂である。

SP07

調査区の北東隅において検出された。平面形は円形であり、径0.5mを測る。深さはほとんどない。埋土は暗褐色シルト質極細砂である。

第4節 古代の遺物

井手東Ⅱ遺跡では、古代と考えられる遺構は確認できていないが、遺構検出を行っている段階および、SD01最上層の若干の窪み等に堆積した層から、一部古墳時代に遡るものから古代にかけての遺物が出土している。（第29図）出土した遺物はいずれも須恵器であり、細片が多い。1.2は、杯蓋である。いずれも天井部が高くならない形態をするものと考えられる。3～11は杯身である。3は他のものに比べて古い。11にはしっかりとした高台がつく。11～14は底部近くしか残存していないが、底径、形態等から皿である可能性が高い。15は古墳時代の器台の脚部と考えられるもので、二段の透孔と波状文、その間に突帯が巡る。前述したとおり当該期に属する遺構は確認できていないが、周辺部に遺構が存在しているか、存在していた可能性が考えられる。

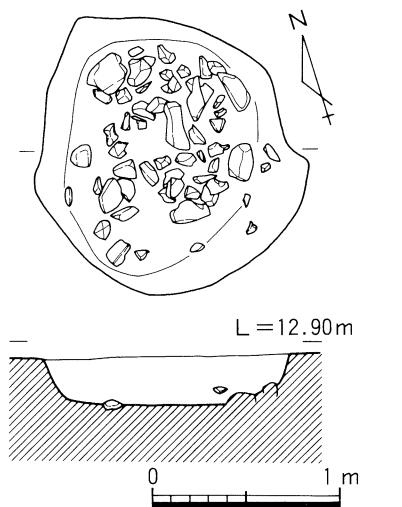


第29図 遺構外出土土器実測図

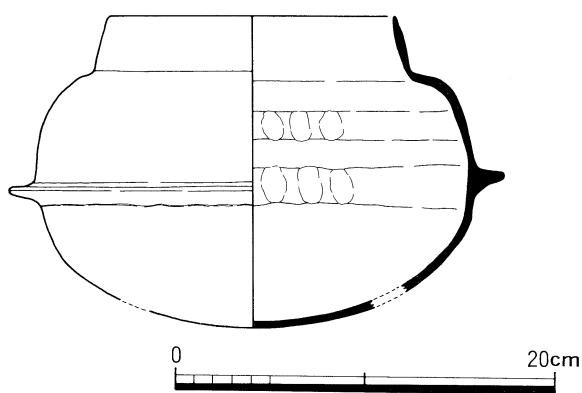
第5節 近世の遺構と遺物

SK01（第30図）

調査区の北西隅において検出された。平面形は不正円形を呈し、 $1.3 \times 1.48\text{m}$ を測る土坑である。深さ 0.26m である。埋土は白灰色シルト質極細砂、暗褐色土ブロックである。土坑内には小石～最大 20cm を測る礫が多量に検出された。底面は平坦であり、掘り込みは急傾斜である。



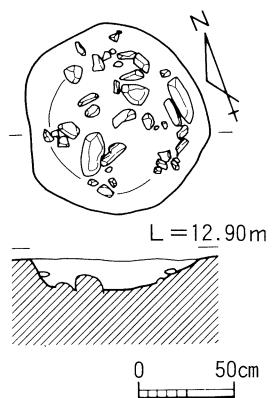
第30図 SK01実測図



第31図 SK01出土土器実測図

SK02（第32図）

調査区の北西隅においてSK01の北側で検出された。平面形は円形を呈し、 $0.9 \times 1.02\text{m}$ 、深さ 0.15m を測る土坑である。埋土は白灰色シルト質極細砂、暗褐色土ブロックである。底面は平坦であり、掘り込みは緩やかである。土坑内に多量の礫が検出され、その大きさは小石～最大 23cm である。

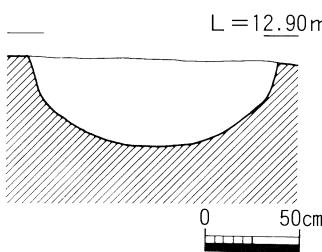


第32図 SK02実測図

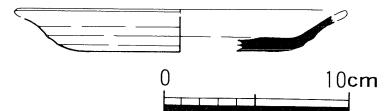
SK03（第33図）

調査区北側の中央やや西よりにおいて検出された。平面形は、南北に長軸をもつ橢円形を呈

し、 $1.3 \times 3.8\text{m}$ の規模を測る。中央部は急激に深くなり、南北にテラス状の高まりがある。最深部の深さは 0.46m 、テラス部は 0.09m である。埋土は白灰色シルト質極細砂、暗褐色ブロックである。



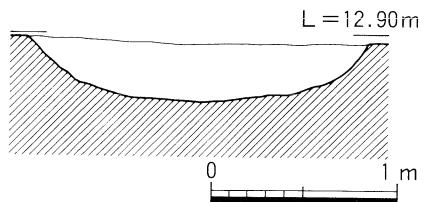
第33図 SK03土層図



第34図 SK03出土土器実測図

SK04（第35図）

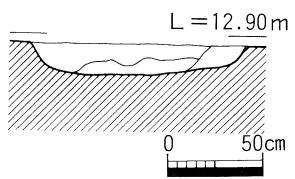
調査区の南西部において検出された。平面形は隅丸方形を呈し、短辺 1.84m 、長辺 2.2m 、深さ 0.3m を測る。掘り込みは緩やかで、底面中央がやや凹んでいる。埋土は白灰色シルト質極細砂、暗褐色土ブロックである。この土坑はSD08・10を切っている。



第35図 SK04土層図

SK05（第36図）

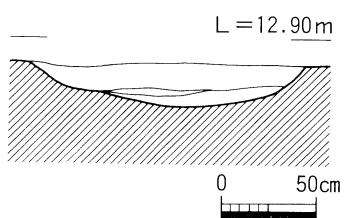
調査区の南西部、SK04の東側において検出された。平面形は隅丸方形を呈し、短辺 0.9m 、長辺 1.2m を測る。掘り込みは緩やかであり、底面はほぼ平坦である。埋土は白灰色シルト質極細砂+暗褐色土ブロック、灰色シルト質極細砂、浅黄色シルト質極細砂の3層である。この土坑はSD08上に作られている。



第36図 SK05土層図

SK06（第37図）

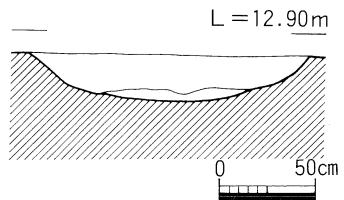
調査区南側中央やや東よりにおいて検出された。南側は試掘トレンチによって削平されているが、平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。一辺の長さは 1.5m であり、深さ 0.25m を測る。掘り込みは緩やかであり、底面中央がやや凹んでいる。埋土は上から白灰色シルト質極細砂+暗褐色土ブロック、灰色シルト質極細砂、白灰色シルト質細砂である。この土坑はSD01を切っている。



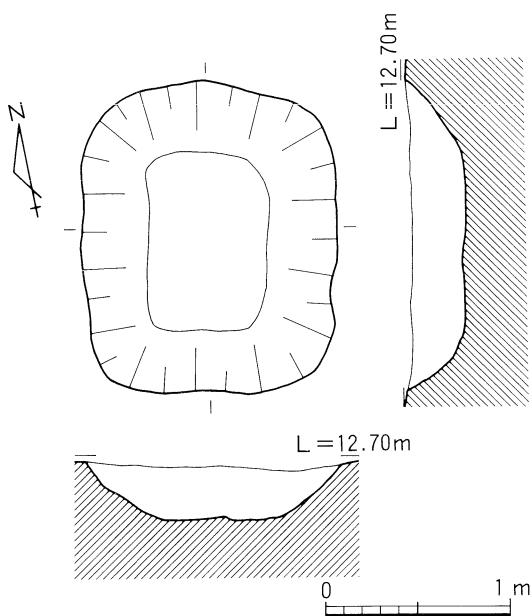
第37図 SK06土層図

SK07 (第38図)

調査区南側中央やや東よりSK06の東側で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、短辺1.2m、長辺1.5m、深さ0.25mを測る。掘り込みは緩やかであり、底面はほぼ平坦である。埋土は白灰色シルト質極細砂+暗褐色土ブロック、白灰色細～中砂である。この土坑はSP01によって切られている。



第38図 SK07土層図



第39図 SK08実測図

SK08 (第39図)

調査区の北東部において検出した。平面形は隅丸方形を呈し、短辺1.35m、長辺1.7m、深さ0.3mを測る。掘り込みは非常に緩やかであり、底面はほぼ平坦である。埋土は白灰色シルト質細砂+褐色土ブロックである。この土坑はSD01の埋没後に作られている。

SK09 (第40図)

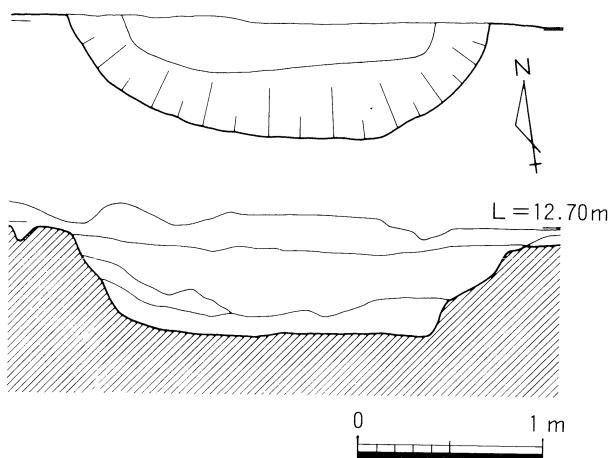
調査区の北東隅において検出された。北半分は調査区外であるため、平面形は不明であるが、橢円形と想定できる。長径は2.25m、深さ0.5を測る。埋土は白灰色シルト質極細砂+暗褐色土ブロックである。

SD13

調査区の北東隅において検出された。SD12の東側に平行して走っている。幅0.2m、深さ0.02を測り、非常に小規模の溝である。埋土は黄灰色シルト質極細砂である。この溝はSD14を切っている。

SP01

調査区南側やや東寄り、SK06とSK07の間で検出された。短辺0.4m、長辺0.7m、深さ0.04mを測る。平面形は隅丸方形である。埋土は白灰色シルト質極細砂である。



第40図 SK09実測図

SP05

調査区北側やや西より、SK03の南側において検出した。平面形は円形を呈する。径は0.4m、深さ0.05mを測る。埋土は白灰色シルト質極細砂である。

第 4 章

調査のまとめ

第1節 遺構について

本遺跡の調査で検出された遺構は、溝14・土坑9・ピット7である。時期としては、溝とピットが弥生時代、土坑は近世のものと考えられる。

溝は、その規模によって大小2種類に分けられる。

前者はSD01と呼称するもので、幅約10m、深さ0.7mを測り、ほとんど時期差が認められない上下2層の堆積によって埋積されている。両層ともほぼ同一の流れを辿っているが、上層が僅かに深さ、幅ともに大きく変化している。また、溝底付近には細～中砂が厚く堆積していることから、當時水の流れがあったことが考えられる。出土遺物は、底面より弥生時代前期および縄文晩期の土器、石棒が出土した。

もう一方の溝は、SD02～14と呼称する、幅狭で浅いグループである。このうち、SD02～10はSD01の西側に位置し、東西方向のSD10を除いて全て南北方向に走っている。これらの切り合い関係を見ると、SD03が全ての溝を切り、SD03以外の溝をSD08が切っている。SD06から弥生時代後期の土器が出土しており、他の溝もほとんど同時期と考えられる。ただし、SD02に関しては埋土がSD01の第2層と同一なことからSD01と同時期であろう。SD11～14はSD01より東側にあり、SD14がSD12・13に切られている。これらの溝も埋土から弥生時代後期のものと考えられる。

ピットは調査区全域に検出される。SP01は、SK07を切り、近世のものであるが、他のピットは埋土の状態から考えると弥生時代後期のものであろう。

土坑は全て近世のものであり、その形態から2種類に分類できる。SK01・02は、平面円形を呈し、土坑内に多量の小石・礫を充填している。SK03～09は、隅丸方形の平面形である。いずれの土坑の埋土も白灰色シルト質極細砂+褐色土ブロックで、同時期のものと考えられる。これらのうち、後者の土坑は、いわゆる‘野井戸’と考えられるが、SK01・02はやや異なる性格を有していると思われる。

弥生時代の溝（SD01）は用水路としての機能を持つと考えられ、近辺に同時期の水田の存在を示唆している。また、位置的にも微地形復原による微高地上に該当することから、弥生時代、近世を通じて微高地上に開削した水路から周囲に水配りを施す典型的な例と認められる。SD01・02は時期的にも古いもので、SD01はその規模から見ても主要幹線として利用されていたものであろう。また、溝内から土器の他に祭祀具としての性格をもつ石棒が出土していることから距離的にそう遠くないところに人間の営み～いわゆる集落～が存在していたのではないだろうか。

第2節 遺物について

井手東Ⅱ遺跡から出土した遺物の大半は、SD01（Ⅱ期）からのものであり、出土遺物は縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての土器および石器である。量的には少なかったものの、古い要素のものと新しい要素のものが混在して出土している。SD01は前述のとおり土層堆積状況から二つの時期に分かれており、土器では、新しい方のⅠ期では量的には少ないが、弥生時代前期古段階と考えられる口縁部下に段をもつ古い要素の壺の破片が確認できる。この時期の出土遺物には弥生時代前期と考えられるもの以外は認められない。一方古い時期のⅡ期では、いづれも破片が多いが、縄文晚期と考えられる突帯文をもつ深鉢の破片が数点認められる他、弥生時代前期と考えられる頸部下年に数条の竪描沈線文を巡らす壺、体部最大径に刻目突帯文を巡らせるもの等が混在している。石器については石鏸、削器、石鋤（打製石斧）等が認められ、量的には石鋤と削器がほぼ同数である。石器についてはこれ以外に、結晶片岩製の石棒が出土している。県内では縄文時代の遺跡の発掘調査が少ないとてもよるが、石棒の出土遺跡は、善通寺市中村遺跡で一例出土している以外の例は把握していない。当遺跡から出土した石棒はいくつかの破片となって出土していることから、破碎して溝に投棄された可能性が考えられる。

以上井手東Ⅱ遺跡の遺構および遺物についてまとめてみたが、調査範囲も狭く、検出した遺構・遺物についても量的に少なく、試掘結果から東部へ遺構は延びる可能性がない。調査の関係で二遺跡として調査したが、遺構のつながりからすれば、当遺跡の西側で調査し、現在整理作業を行っている居石遺跡東部の遺構・遺物の状況と酷似していることから、居石遺跡の報告書において再度検討したい。

遺物觀察表

遺物観察表（土器）

SD01（Ⅰ期）出土土器

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴
第9図-1		弥生土器 甕	残存高3.3	
-2	図版10	弥生土器 壺	口径29.2 残存高6.5	口縁部 凹線1条
-3	"	"	口径32.0 残存高5.5	
-4	"	"	口径32.0 残存高6	

SD01（Ⅱ期）出土土器

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴
第10図-1		縄文土器 深鉢	残存高1.7	口縁部 突帯文
-2	図版10	"	残存高3.2	口縁部 突帯文
-3	"	"	残存高3.4	口縁部 刻目文
-4	"	"	残存高3.5	口縁端部 刻目文 口縁部 刻目突帯文
-5	"	"	残存高3.5	口縁部 刻目文
-6	"	"	口径28.0 残存高8.0	口縁端部 ヘラ描沈線文・刻目文 頸部 ヘラ描沈線文
-7	"	"	口径28.8 残存高5.7	口縁端部 突帯文
-8	"	"	口径36.0 残存高5.5	口縁端部 突帯文 頸部 ヘラ描沈線文
第11図-1		弥生土器 壺	口径10.2 残存高3.5	

成形及び調整技法	胎 土	色 調	焼成	備 考
口縁部外面 磨滅の為調整不明	1mm以下の石英、長石を多量に含む	表 にぶい黄褐 裏 灰黄	良	
口縁部内面 ヨコナデ				
口縁部外面 ナデ	2mm以下の石英を多量に含み、角閃石も少量含む	表 灰白 裏 "	不良	口縁部の一部 黒斑
口縁部内面 ヨコナデ				
口縁部外面 ヨコナデ	2mm以下の石英を多量に含む	表 灰白 裏 灰黄	良	
口縁部内面 磨滅の為調整不明				
口縁部外面 磨滅の為調整不明	3mm以下の石英、長石を多量に含む	表 灰白 裏 "	不良	外面に黒斑
口縁部内面 "				

成形及び調整技法	胎 土	色 調	焼成	備 考
口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の石英を含む	表 灰黄褐 裏 灰白	良	
口縁部外面 磨滅の為調整不明	1mm以下の石英を多量に含み、	表 灰白	良	
口縁部内面 ヨコナデ	少量の角閃石も含む	裏 "		
口縁部外面 ヨコナデ	3mm以下の石英を多量に含む	表 灰白 裏 褐白	良	
口縁部内面 磨滅の為調整不明				
口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の石英を多量に含む	表 暗黄褐 裏 灰黄	良	
口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の石英を多量に含み、長石、角閃石も含む	表 黄灰 裏 "	不良	
口縁部外面 卷貝によるケズリ	1mm～2mmの石英、長石を多量に含む	表 にぶい黄褐 裏 "	良	
口縁部内面 ヘラケズリ				
口縁部外面 ナデ	2mm以下の石英を多量に含み、	表 黒褐	良	
口縁部内面 磨滅の為調整不明	少量の角閃石も含む	裏 "		
口縁部内外面 ヨコナデ	2mm以下の石英、長石を多量に含み、少量の角閃石も含む	表 灰黄褐 裏 "	良	
口縁部内外面	4mm以下の石英を多量に含む	表 灰黄 裏 "	良	
磨滅の為調整不明				

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴
第11図-2		弥生土器 壺	口径14.4 残存高2.7	
-3	図版10	"	残存高3.0	
-4		"	残存高4.1	体部外面 ヘラ描沈線文4条
-5		"	口径17.0 残存高3.3	
-6	図版10	"	口径20.2 残存高5.3	
-7	"	"	残存高3.4	
-8	"	"	残存高4.0	体部外面 ヘラ描沈線文
-9	"	"	残存高7.0	体部外面 ヘラ描沈線文3条
-10		"	残存高8.5	体部外面 刻目突帶文2条
-11	図版10	"	口径30.4 残存高2.5	体部外面 ヘラ描沈線文1条
-12		弥生土器 甕	残存高1.0	
-13	図版10	"	残存高4.2	
-14	"	"	残存高2.5	体部外面 ヘラ描沈線文
-15	"	"	口径21.4 残存高3.7	口縁端部 刻目突帶文 体部外面 ヘラ描沈線文2条
-16		弥生土器 底部	底径7.0 残存高2.5	
-17		"	底径8.0 残存高1.8	
-18		"	底径7.5 残存高3.0	

成形及び調整技法	胎 土	色 調	焼成	備 考
口縁部内外面 磨滅の為調整不明	2 mm以下の石英、長石を多量に含む	表 にぶい黄橙 裏 "	不良	
口縁部外面 ヨコナデ 口縁部内面 磨滅の為調整不明	1 mm以下の石英、長石を多量に含む	表 灰黄 裏 "	良	
口縁部内外面 磨滅の為調整不明	1 mm以下の長石を含む	表 明褐灰 裏 にぶい橙	良	
口縁部内外面 ヨコナデ	2 mm以下の石英を多量に含む 角閃石も含む	表 褐灰 裏 "	良	
口縁部内外面 磨滅の為調整不明	2 mm以下の長石、石英を多量に含む	表 灰白 裏 "	不良	
口縁部外面 ナデ	1 mm以下の長石、石英、角閃石を少量含む	表 灰白 裏 淡黄	良	
口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ヨコナデ	1 mm以下の石英、長石を多量に含む 雲母が少量	表 灰白 裏 "	良	
口縁部外面 ヘラミガキ 口縁部内面 ヨコナデ	2 mm以下の石英、長石を多量に含む	表 灰白 裏 "	良	
口縁部内面 ナデ	"	表 灰白 裏 "	良	
口縁部内外面 磨滅の為調整不明	1 mm以下の石英を多量に含む	表 灰白 裏 "	良	
口縁部内外面 磨滅の為調整不明	"	表 灰白 裏 淡黄	不良	
口縁部内外面 磨滅の為調整不明	1 mm以下の石英、長石を多量に含む	表 浅黄橙 裏 "	良	
口縁部内面 磨滅の為調整不明	1 mm以下の石英を多量に含む	表 灰白 裏 にぶい黄橙	良	
口縁部内面 ヨコナデ	2 mm以下の石英を多量に含む	表 黄灰 裏 灰白	良	
底部内外面 磨滅の為調整不明	"	表 淡黄 裏 "	良	
底部外面 ヘラミガキ ハケ目 底部内面 ヨコナデ	2 mm以下の石英、長石を多量に含む	表 灰白 裏 褐灰	不良	
底部外面 ヘラミガキ ナデ 底部内面 ヨコナデ	3 mm以下の石英を多量に含む 角閃石も少量含む	表 灰白 裏 "	良好	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴
第11図-19		弥生土器 底部	底径6.8 残存高5.0	
-20		"	底径6.8 残存高2.8	
-21		"	底径8.0 残存高3.0	
-22		"	底径8.0 残存高3.7	
-23		"	底径6.0 残存高5.0	
-24		"	底径8.0 残存高5.2	
-25		"	底径9.0 残存高5.5	
-26		"	底径10.0 残存高6.0	

SD01出土土器

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴
第15図-1		縄文土器 深鉢	残存高2.7	
-2		弥生土器 壺 肩部	残存高2.7	胴部外面 ヘラ描沈線文
-3		弥生土器 甕	口径20.0 残存高4.5	口縁端部 凹線2条
-4		弥生土器 底部	底径8.0 残存高2.0	
-5		"	底径6.0 残存高3.0	
-6		"	底径10.0 残存高1.5	
-7		"	底径10.0 残存高2.0	

成形及び調整技法	胎 土	色 調	焼成	備 考
底部外面 ヘラミガキ 底部内面 ヨコナデ	3mm以下の石英を多量に含む 角閃石もあり	表 灰白 裏 "	良	
底部外面 ヨコナデ 底部内面 磨滅の為調整不明	2mm以下の石英を多量に含み、 少量の長石もあり	表 にぶい黄橙 裏 灰白	良	
底部外面 ヘラミガキ ナデ 底部内面 ナデ	3mm以下の石英、長石を多量 に含む	表 にぶい橙 裏 "	良	
底部外面 ヨコナデ 底部内面 ヘラミガキ ナデ	1mm以下の石英を多量に含む	表 灰白 裏 "	良	
底部外面 ヘラミガキ 底部内面 ヨコナデ	2mm以下の石英を多量に含む	表 灰黄 裏 灰白	良	
底部外面 ヨコナデ 底部内面 ナデ	3mm以下の石英、長石を多量 に含む	表 にぶい橙 裏 赤黒	良	
底部内外面 ヘラミガキ	3mm以下の石英、角閃石を少 量含む	表 灰黄 裏 "	良	
底部外面 ヨコナデ	2mm以下の石英、長石を多量 に含む 角閃石も少量含む	表 灰黄 裏 "	良	

成形及び調整技法	胎 土	色 調	焼成	備 考
口縁部内外面 磨滅の為調整不明	2mm以下の長石、石英を多量 に含み、角閃石もあり	表 にぶい黄橙 裏 "	良	
	2mm以下の石英、長石を含む	表 灰白 裏 黄灰	良	
口縁部外面 ハケメ 口縁部内面 ヨコナデ ヘラケズリ	3mm以下の長石、石英を多量 に含み、角閃石も少量含む	表 にぶい橙 裏 明褐灰	良	
磨滅の為調整不明	2mm以下の長石が少量、1mm 以下の石英を多量に含む	表 褐灰 裏 にぶい黄橙	不良	外面底部に黒斑 あり
磨滅の為調整不明	2mm以下の石英を多量に含む	表 黄灰 裏 にぶい黄	良	
底部内外面 磨滅の為調整不明	2mm以下の石英を多量に含み、 少量の長石を含む	表 灰白 裏 "	不良	
底部外面 ヘラミガキ 底部内面 ヨコナデ	1mm以下の石英、角閃石を多 量に含む	表 にぶい黄橙 裏 灰白	良	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴
第15図-8		弥生土器 底部	底径8.0 残存高6.0	
-9		"	底径10.0 残存高4.5	
-10		"	底径12.0 残存高3.0	
-11		"	底径10.0 残存高4.5	
-12		"	底径7.0 残存高3.5	
-13		"	底径10.0 残存高4.0	
-14		"	底径13.0 残存高4.9	

SD06出土土器

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴
第20図		弥生土器 底部	底径8.0 残存高2.5	

SD08出土土器

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴
第24図		弥生土器 壺	口径13.2 残存高1.9	

遺構出土土器

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴
第29図-1		須恵器 蓋	底径10.0 残存高1.5	
-2		"	口径15.3 残存高1.5	
-3		須恵器 壺	口径13.0 残存高2.8	
-4		"	残存高2.0	

成形及び調整技法	胎 土	色 調	焼成	備 考
底部外面 ヨコナデ	3mm以下の長石、石英を多量に含み、角閃石を少量含む	表 にぶい黄褐 裏 褐灰	不良	内面に黒斑あり
底部内面 板ナデ				
底部外面 磨滅の為調整不明	1mm以下の石英を多量に含む	表 灰白 裏 "	良	
底部内面 ナデ(指頭圧痕が残る)				
底部外面 ヘラミガキ	1mm以下の石英を多量に、角閃石を少量含む	表 灰黄 裏 灰白	良	
底部内面 磨滅の為調整不明				
底部内外面 磨滅の為調整不明	1mm以下の石英を多量に含む	表 灰白 裏 "	不良	
底部内外面 ヨコナデ	1mm以下の石英を多量に、角閃石を少量含む	表 灰白 裏 "	不良	
底部外面 磨滅の為調整不明	1mm以下の石英を多量に含む	表 淡赤橙 裏 にぶい黄橙	良	
底部内面 ヘラミガキ				
底部外面 ヘラミガキ	2mm以下の石英を多量に含む	表 にぶい黄橙 裏 灰白	良	
底部内面 磨滅の為調整不明				

成形及び調整技法	胎 土	色 調	焼成	備 考
口縁部内外面 ヨコナデ	3mm以下の長石、石英を多量に含み、角閃石も少量含む	表 にぶい赤褐 裏 赤灰	良	

成形及び調整技法	胎 土	色 調	焼成	備 考
口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の石英を少量含む	表 にぶい黄橙	良	下川津B類土器 の胎土をもつ

成形及び調整技法	胎 土	色 調	焼成	備 考
口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を少量含む	表 灰 裏 "	良	
口縁部内外面 ヨコナデ	"	表 灰 裏 灰白	良	
口縁部内外面 ヨコナデ	"	表 灰白 裏 "	良	
口縁部内外面 ヨコナデ	"	表 灰 裏 "	良	

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴
第29図-5		須恵器 壺	口径10.0 残存高2.9	
-6		"	口径12.2 残存高1.5	
-7		"	口径12.2 残存高1.9	
-8		"	口径12.0 残存高2.3	
-9		"	口径13.2 残存高1.5	
-10		"	口径16.2 残存高1.7	
-11		"	底径8.2 残存高2.3	
-12		"	底径7.5 残存高5.0	
-13		"	底径10.0 残存高1.5	
-14		須恵器 皿	底径12.0 残存高8.0	
-15		須恵器 器台の脚部	残存高5.6	脚部外面 波状文 長方形の透孔 " 凸帶文3条

SK01出土土器

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴
第31図	図版11	土釜	口径15.4 残存高14.5	口縁部 指頭圧痕

SK03出土土器

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm)	施文の特徴
第34図		須恵器 皿	底径12.0 残存高1.8	

成形及び調整技法	胎 土	色 調	焼成	備 考
口縁部内外面 ヨコナデ	1mm以下の砂粒を少量含む	表 灰白 裏 "	良	
口縁部内外面 ヨコナデ	"	表 明紫灰 裏 "	良	
口縁部内外面 ヨコナデ	"	表 灰白 裏 "	良	
口縁部内外面 ヨコナデ	"	表 灰 裏 "	良	
口縁部内外面 ヨコナデ	"	表 灰白 裏 "	良	
口縁部内外面 ヨコナデ	"	表 灰白 裏 "	良	
口縁部内外面 ヨコナデ	"	表 灰白 裏 "	良	
底部外面 ヘラ切り ナデ 口縁部内面 ヨコナデ	"	表 明青灰 裏 "	良	
底部外面 ヘラ切り ナデ 口縁部内面 ヨコナデ	"	表 明青灰 裏 "	良	
底部外面 ヘラケズリ 口縁部内面 ヨコナデ	"	表 灰白 裏 "	良	
口縁部内面 ナデ	密	表 灰 裏 "	良好	

成形及び調整技法	胎 土	色 調	焼成	備 考
口縁部内外面 ナデ	1mm以下の長石、石英を含む	表 にぶい黄橙 裏 "	良	

成形及び調整技法	胎 土	色 調	焼成	備 考
口縁部内外面 ナデ	1mm以下の石英を少量含む	表 灰白 裏 "	良	

遺物観察表（石器）

插図番号	図版番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
第12図 - 1	図版 11	石 鏃					サヌカイト	凸基式。大きさの割に厚い素材を使用。先端部は、尖らず、やや鈍い。側縁部は両面からの加工により鋭利に仕上げる。
		削 器	5.1	3.0	0.6		"	明瞭な加工は下縁部のみである。下縁部の加工は、大きな加工が多く、細かな加工はみられない。上縁部は裁断面をそのまま残す。
		"	6.7	4.0	0.8		"	加工が認められるのは上縁部と下縁部である。下縁部は大きな加工がめだつが鋭利である。一方、上縁部の加工は粗く、鈍い。
		"	6.5	5.0	1.1		"	厚めの素材を使用。下縁部以外は加工痕は認められない。下縁部は鋭利な大剝離面を使用し、A面には使用によると考えられる磨滅痕が認められる。
		"					"	明瞭な加工は下縁部のみである。下縁部は両面からの加工により刃部をつくる。
		"	9.0	4.2	0.6		"	明瞭な加工が認められるのは下縁部のみで他は自然面を残す。下縁部は両面からの丁寧な加工により、鋭利な刃部をつくる。
		"	11.7	6.2	1.4		"	両側縁部に裁断面をもつ。下縁部は薄く、上縁部は厚い。下縁部は鋭利な大剝離面の縁部を両面から加工を行い。刃部をつくる。一方、上縁部は、両面から加工を行い。敲打による刃潰しを行う。
第13図 - 8	"	楔形石器	3.7	3.6	1.2		"	厚めの素材を使用。両側縁部に裁断面を残す。上縁部、下縁部とも打撃による階段状剝離が認められる。
		打製石斧 (石 鋸)	6.8	4.6	1.7		"	大半を欠損し、側縁部を一部残すのみである。残る側縁部は両面からの加工により、鋭利である。
		"	7.6	4.9	1.3		"	ほぼ完形。撥形を呈する。全体の調整は粗い。
		"	2.5	3.0	0.4		"	先端部の一部残存。先端部には使用による磨滅が認められる。
		"	4.7	5.2	1.6		"	基部のみ残存。両側縁部の調整は粗いが、鋭利である。
		"	7.1	4.6	1.1		"	完形。撥形を呈する。縁辺部の調整は両面から行われており、丁寧である。先端部には使用によると考えられる磨滅が認められる。
		"	10.5	8.5	2.6			他のものと材質はちがうが、形態等から断定。全体の調整は粗く、厚い素材を使用。
第14図	"	石 棒					結晶片岩	基部を欠損。先端部のくびれはやや不明瞭であるが、境は認められる。基部にいくにしたがい徐々に幅を増す。

図 版



1. SD01 (Ⅱ期) 完掘状況
(北東から)



2. SD01 (Ⅱ期) 完掘状況
(南西から)



1. SD01拡張区（Ⅰ期）完掘状況（南西から）



2. SD01拡張区（Ⅱ期）完掘状況（南西から）



1. SD01セクションベルト(1)土層堆積状況



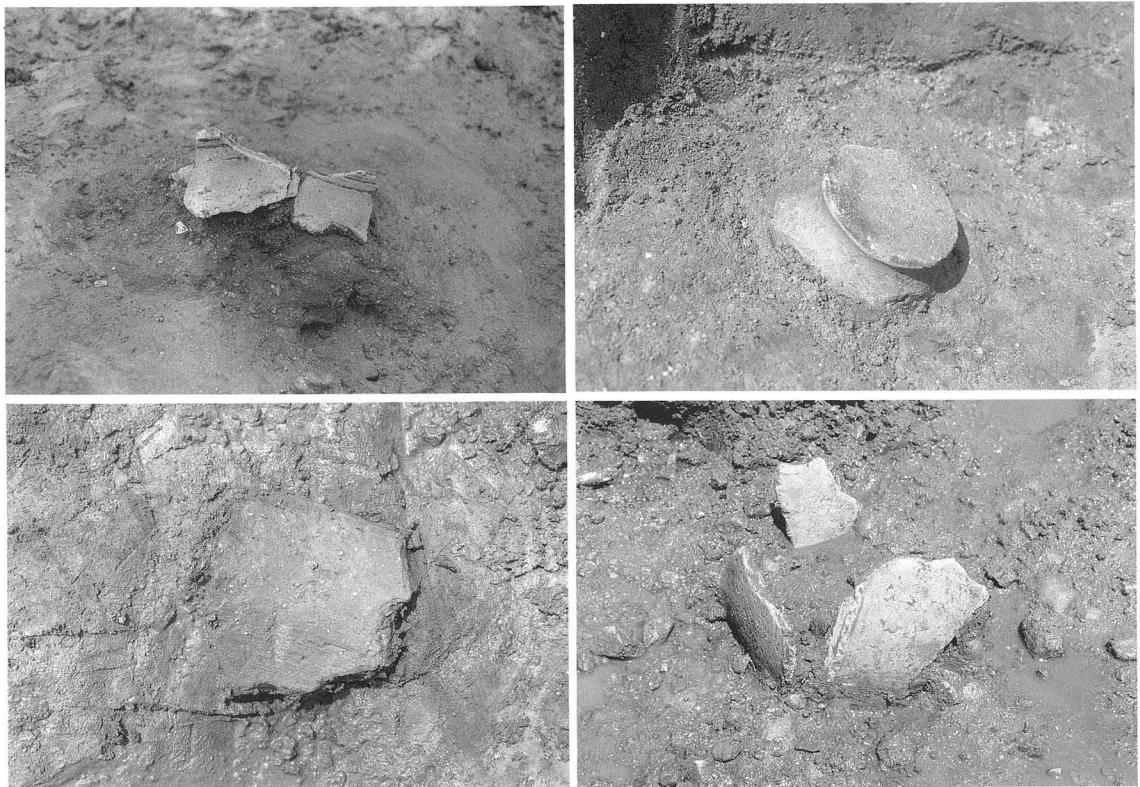
2. SD01セクションベルト(1)細部土層堆積状況



1. SD01セクションベルト(2)土層堆積状況



2. SD01セクションベルト(4)土層堆積状況



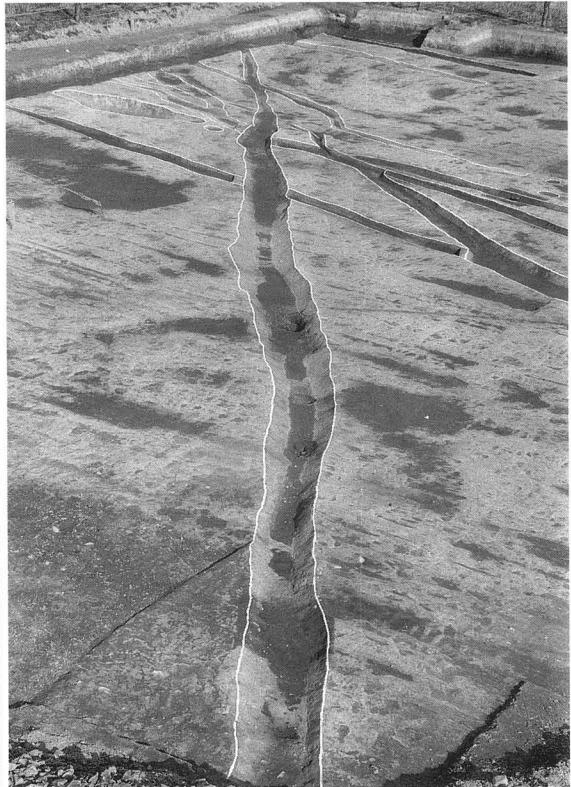
1. SD01 (Ⅱ期) 遺物出土状況



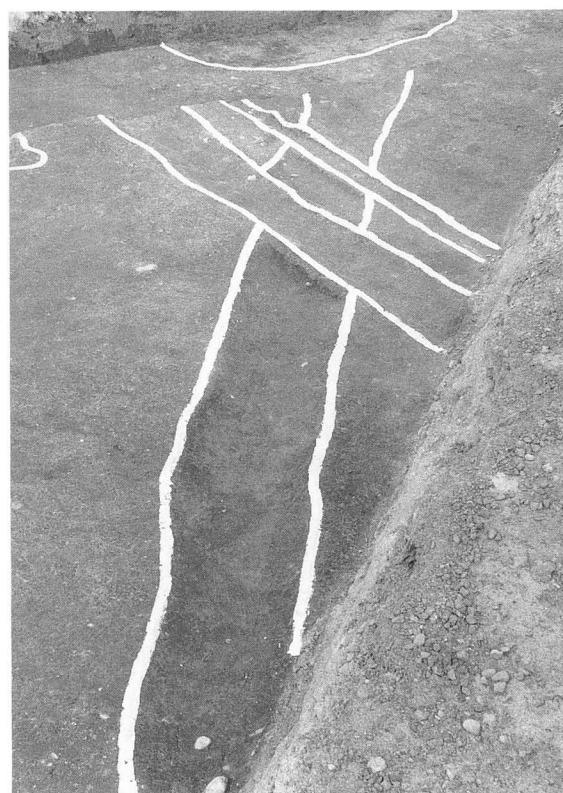
2. SD01 (Ⅱ期) 完掘状況



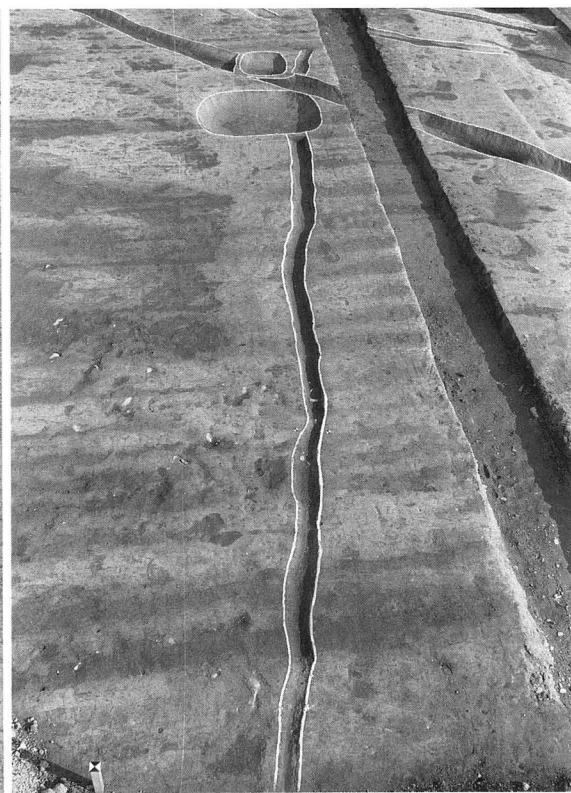
1. SD08完掘状況（南西から）



2. SD03完掘状況（南西から）



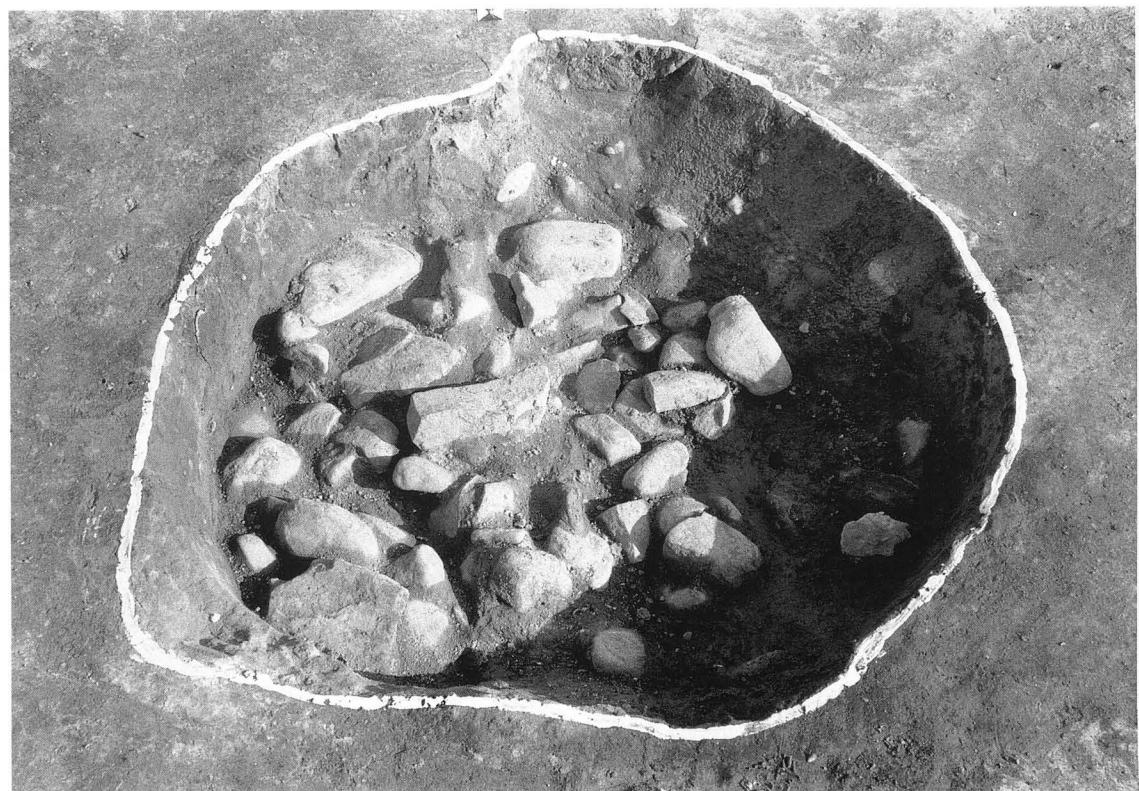
3. SD12~14完掘状況（南西から）



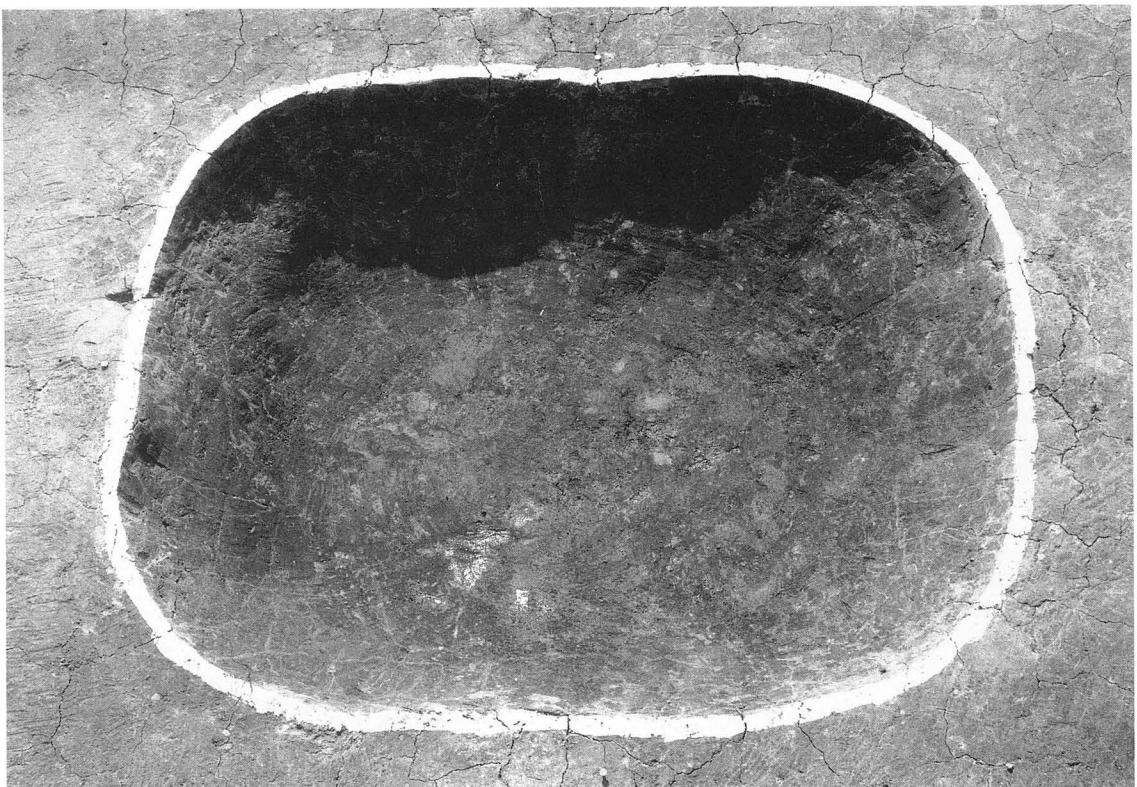
4. SD10完掘状況（西から）



1. SK01・02内集石検出状況（西から）



2. SK01内集石検出状況（西から）



1. SK08完掘状況（東から）

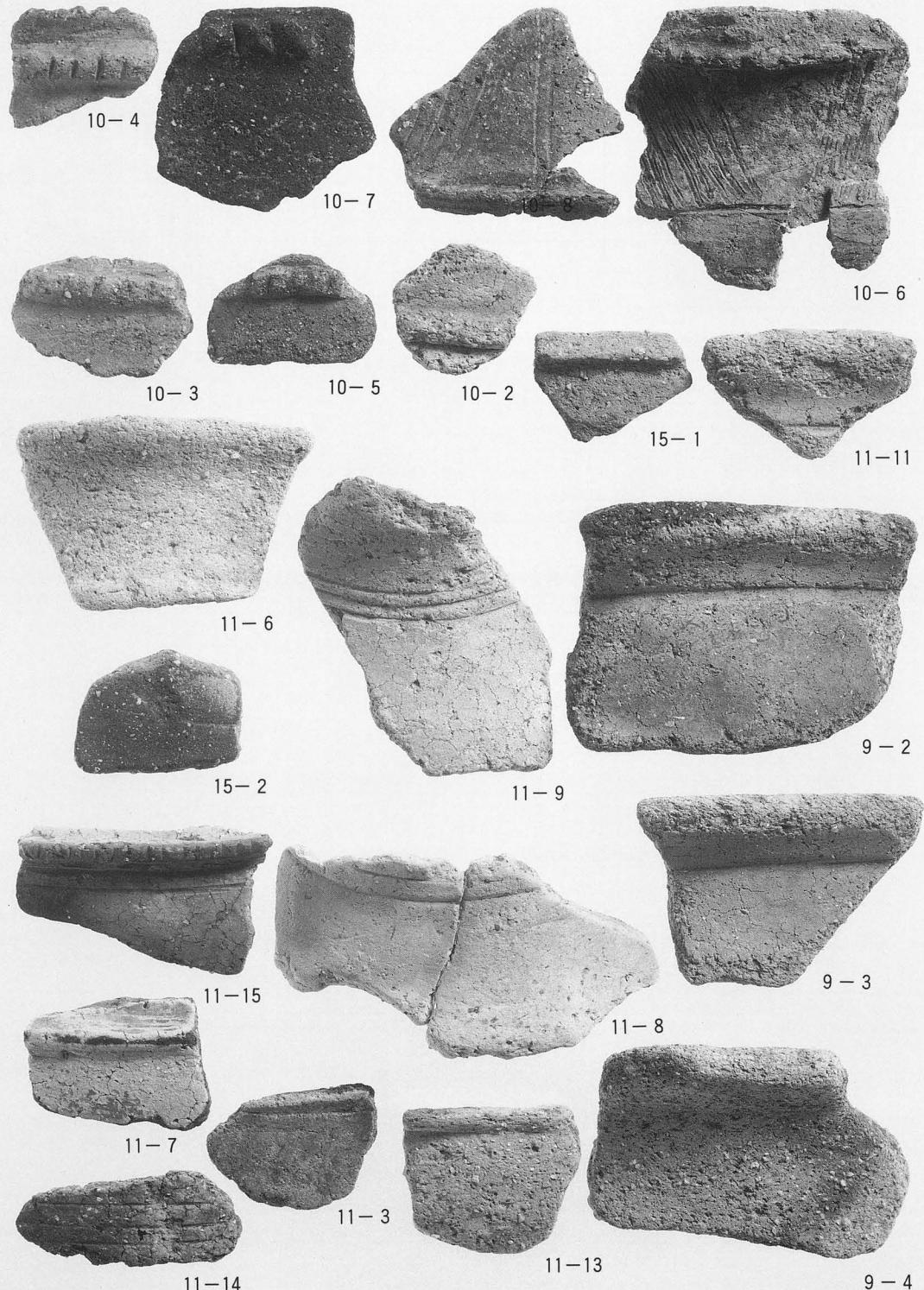


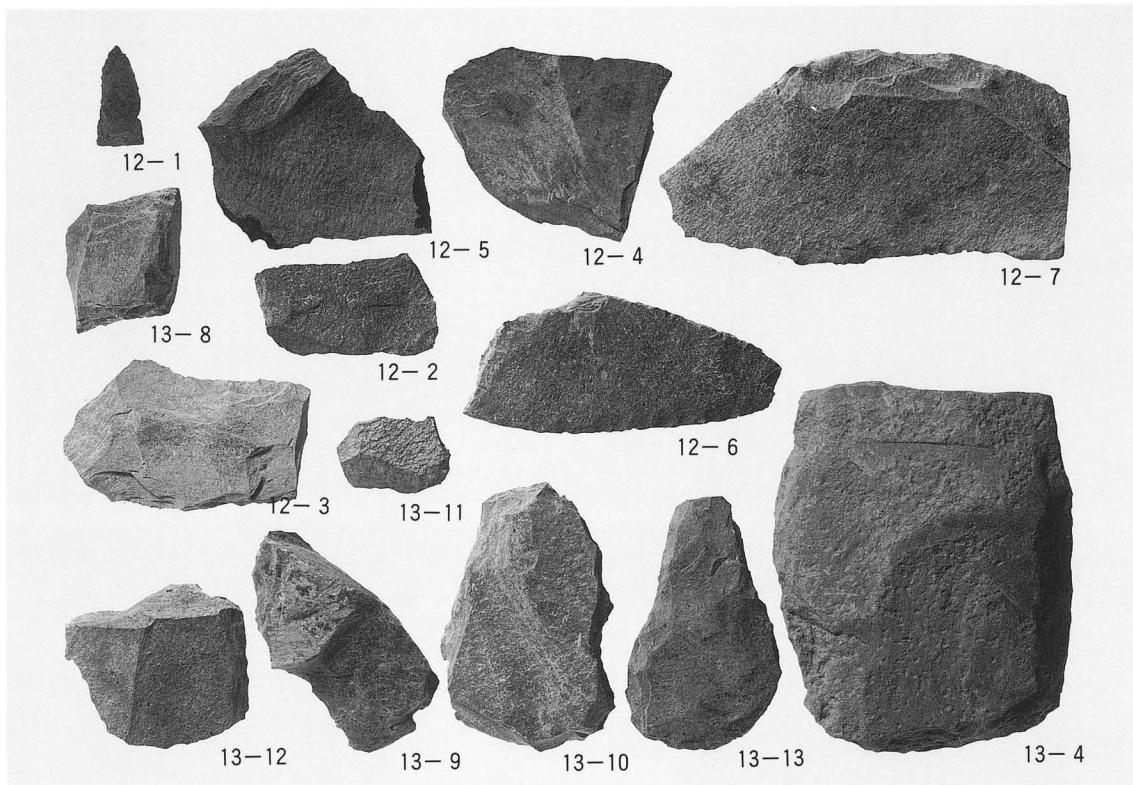
2. SK09完掘状況（南から）

1. SD01 (Ⅱ期) 完掘状況
(南西から)



2. SD01 (Ⅱ期) 完掘状況 (南から)





1. SD01出土石器



2. SD01出土石棒



3. SK01出土土器

報告書抄録

ふりがな	いでひがしにいせき							
書名	井手東Ⅱ遺跡							
副書名	一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
卷次	第五冊							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第27集							
編著者名	山本英之、山元敏裕、中西克也							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760 香川県高松市番町一丁目8番15号 Tel.0878-39-2636							
発行年月日	西暦 1995年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
いでひがしに 井手東Ⅱ	かがわけんたかまつし 香川県高松市 ふせいしきょう 伏石町	37201	—	34度 18分 25秒	134度 3分 45秒	19910109～ 19910226 19910502～ 19910605	2,402	道路（一般 国道11号高 松東道路） 建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
井手東Ⅱ	集落跡	縄文 弥生	溝 ピット	13 6	縄文土器 弥生土器 石器（石棒他）	縄文土器と弥生土器が 共伴		
		近世	土坑 溝 ピット	9 1 1				

一般国道11号高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第五冊

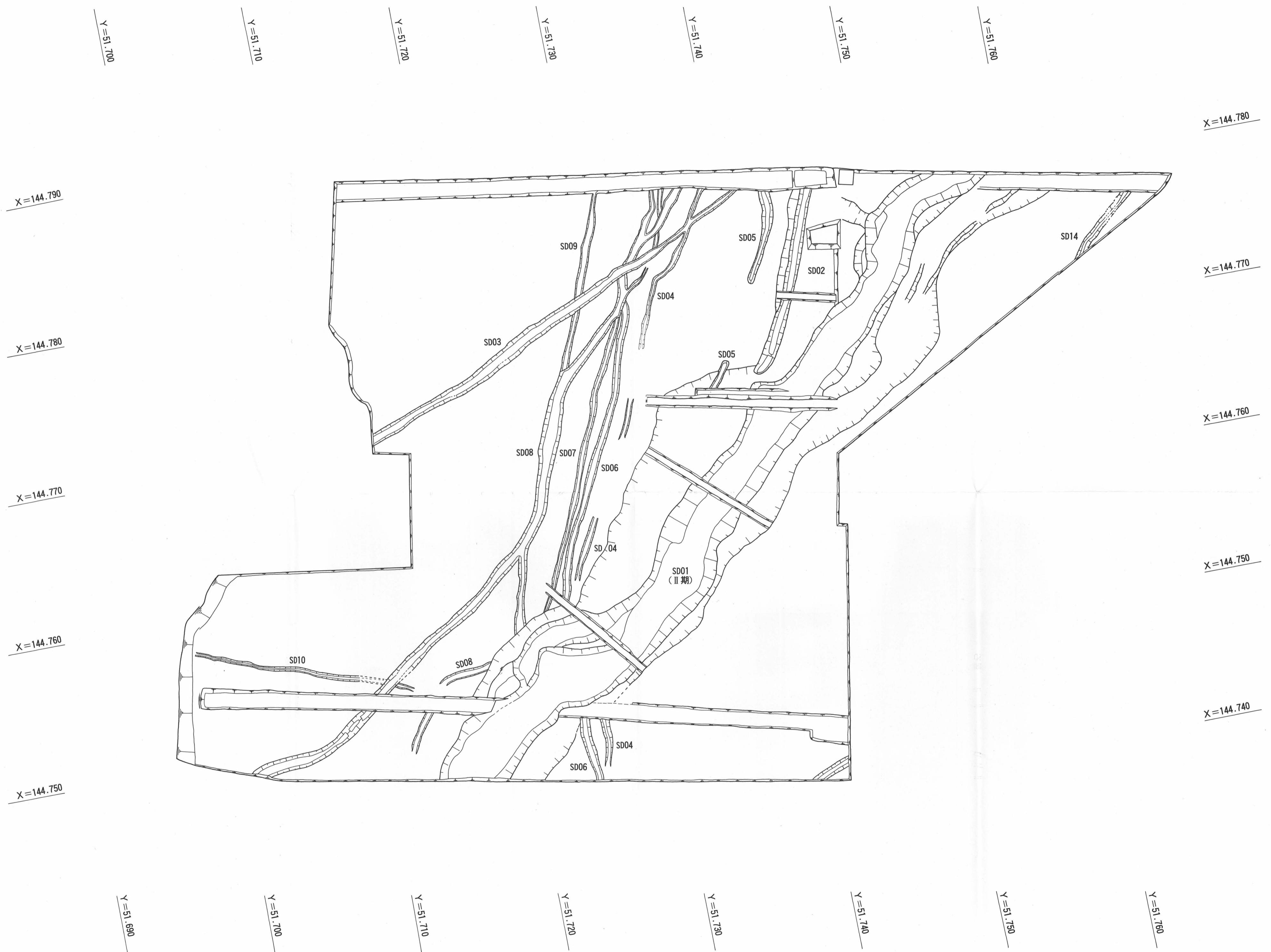
井手東Ⅱ遺跡

平成7年3月31日発行

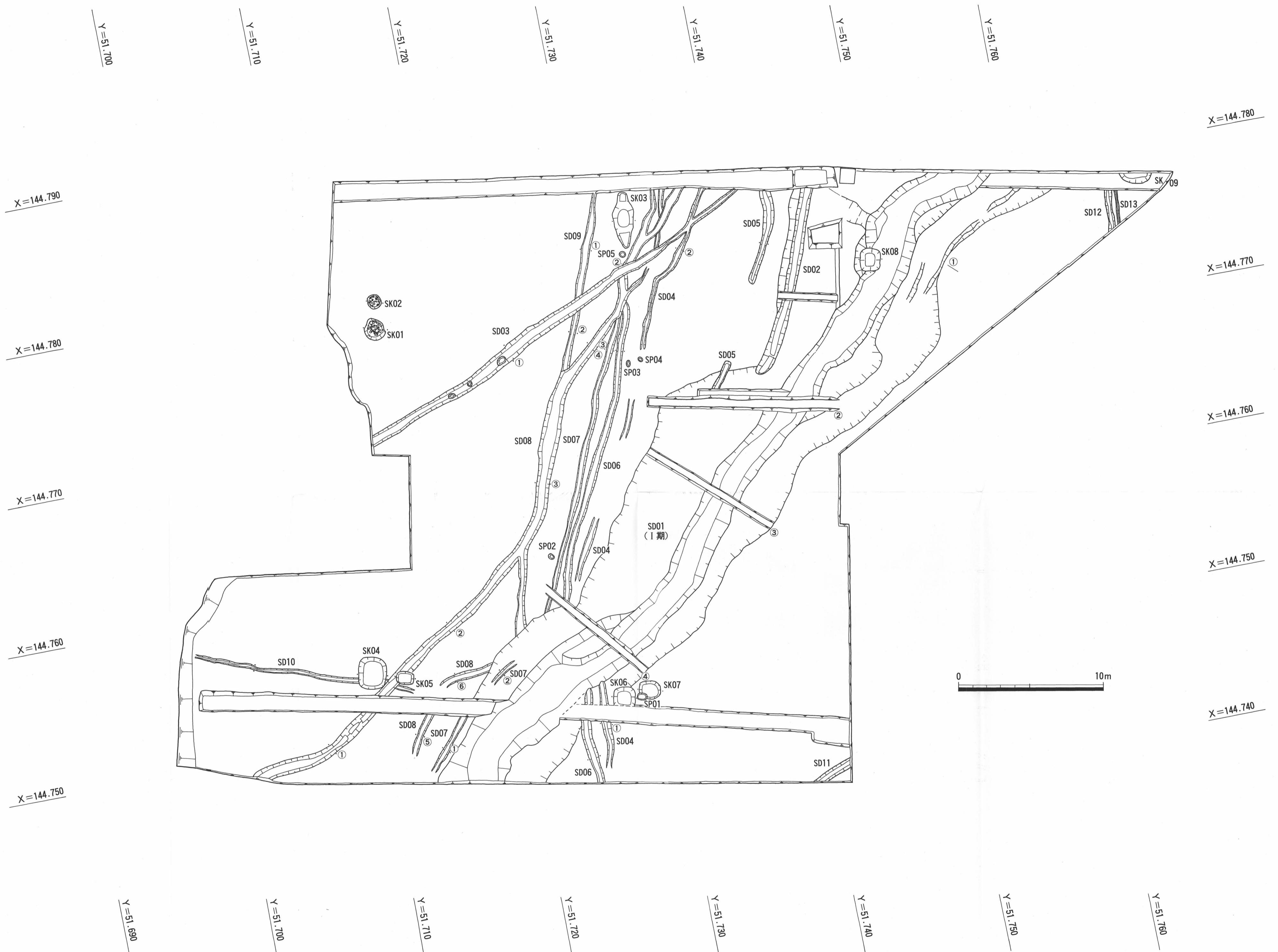
編集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号

発行 高松市教育委員会
建設省四国地方建設局

印刷 株式会社 美巧社



付図1 井手東II遺跡遺構配置図(1) 繩文～弥生時代



付図2 井手東Ⅱ遺跡遺構配置図(2) 弥生時代～近世